

304

221

即洞
一
伏

源氏物語

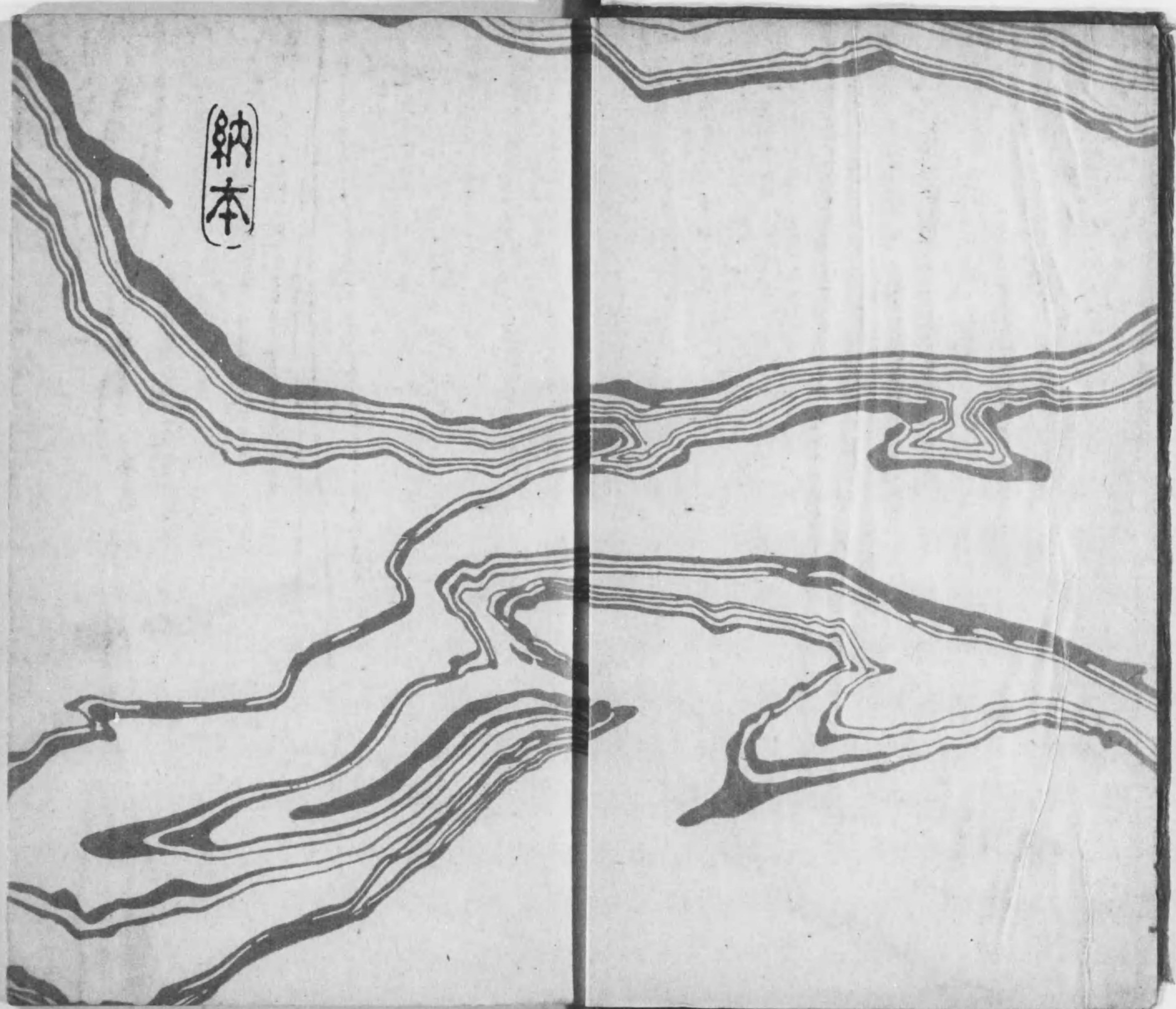
卷二十一

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5

始



納本





山田孝雄
谷崎潤一郎譯

物語

卷二十一

中央公論社發行



304
221

源氏物語卷二十一目次

浮舟

自一
至三

源氏物語卷二十一目次

源氏物語卷二十一

源氏物語卷二十一

谷山
田家
園



浮舟

源氏物語卷二十一 目次

題簽中扉
裝釘地模様

長尾

野上

草柴

風舟

浮舟

浮舟



宮はのまだに、あの誰とも知らずぼんやりと御覽になつた夕暮のこと
を、いつかはお忘れになるべくもない。さうたいそうな身分と云ふの
ではなさうに見えたけれども、人柄が實直で、愛らしいところがあ
つたものをなど、阿娜めいたお心には、何事もなくて済ましておし
まひになつたのを、悔しうお思ひ遊ばしていらつしやる。そして、何
處かへ隠したのだとお取りなされて、おん方にまで、さう云つた風に

當りちらし給うて、「あまりと云へばお情ないことです」と、恥ぢしめられたりお恨みになつたり遊ばすところから、その度毎に女君はお心苦しう、いつそほんたうのことを申し上げようかともお思ひになるのであるが、しかし折角大將の君が、御本妻のやうなお扱ひはなさらないにしてからが、竝々ならぬお志をお寄せなされて、匿うておいでになるお人のことを、餘計なおしやべりをしてお知らせ申したとして、さてそのまゝに聞き流しておしまひになりはしないであらう、お側に侍ふ女房達の中にでも、ちよつと冗談をしかけてみたらうおなりなされた者などがあると、根氣よく追ひかけていらつしやつて、その女の里までもお捜しになると云ふ、體裁のお宜しくない御性質でいらつしやるのに、ましてあれから此方、随分と月日がたつたのに、あんなにも思ひ込んでおいでになるお人のことであるから、きつと見つともない

間違をお起しになるであらう、それも、餘所からお耳へ這入ることがあるのは致し方もない、さうなつた場合は、大將の君にもかのお人にもお氣の毒なことにもならうが、端からお止め申してもお聴きにならないお方であるから、誰方にも怵へて戴くとして、たゞ外の方々とは違つた事情にある私が、人一倍の恥かしさを忍べばよいのだ、兎に角にも、自分の油断から事を破さないやうにしようとお考へ直しになつて、お可哀さうのやうではあるが宮には知らしてお上げにならず、さうかと云つて、お口上手にはぐらかすやうなことはお出来にならないまゝに、じつと押し黙つて、普通の焼餅やきの女になりすましておいでになるのであつた。

かの大將の君は、たとへやうもなく悠長に構へていらつしやつて、さぞ待ち遠しがつてゐるであらうと、いとほしうは思ひやつておいでに

い、戀しくば来て
もみよかし千早
ふる神のいさむ
る道ならなくに
〔伊勢物語〕

口、最初に宇治へ
通ひ出した勤
機、即ち故八宮
を法の友として

なりながら、御窮屈なお身の上のことであるから、然るべきついでが
おありにならないと、ちよつとはお通ひになれないのを、「神のいさむ
る道」にもまして困つていらつしやるのであつたが、まあそのうちに
はお仕合せなやうにして上げよう、さし當つては山里へ行つた時の話
相手にと云ふ積りなのであるから、暫く逗留してゐられるやうな口實
を作つて、ゆつくり逢ひに出かけてもみよう、そして、當分の間は彼
處を人に知られない隠れ家にして、だん／＼とさう云ふ風にかの人を
も納得させておいて、自分も世間から非難を受けないやうな風に、穩
かに運んで行くとしよう、さもなくて、「まあ突然に」とか、「相手は誰
だらう」とか、「いつからだらう」とか聞き咎められるのは、うるさく
もあるし、最初の考とも違つて来る、それに又、宮のおん方がお聞き
になるところを思つても、由緒のある土地を未練げもなく捨て、しま

お慕ひ申し上げ
た道心を指す

つて、昔を忘れたやうに振舞ふのは、甚だ不本意なことだからなど、
御料簡遊ばして、辛抱しておいでになると云ふのも、例のあまりにも
氣のお長いせむなのであらう。でも、いづれは迎へ取つて上げるやう
にと、内々で御普請を遊ばしたりして、少しは前よりもお忙しいお體
におなりになつたが、未だに矢張宮のおん方にはお心を寄せていらし
つて、愈らず面倒を見てお上げになることは、今も以前の通りなので、
疑ひの眼でお眺め申し上げる人々もあるのだけれども、やう／＼世の
中と云ふものが分つていらしつたおん方は、そんなおん有様を見たり
聞いたりなさるにつけても、いつ迄も昔をお忘れにならないで亡き姉
君の縁につながる私にさへも此のやうに盡して下さるとは、これこそ
ほんたうに氣がお長いと申し上げようか、さりとは類ないお志よと、
流石に感動なさらずにはいらつしやれない。追ひ／＼お年をお召しに

なるに随つて、御人品と申し、御聲望と申し、竝々ならぬお方におなり遊ばしたのに、それに引きかへて宮のお心のあまりにも頼りないのを見せつけられ給ふをりくは、自分は何と云ふ不仕合せな宿世であつたのか、故姉上が取り計らつて下すつたやうにはならないで、かう云ふ苦勞や氣がねの多いあたりに縁を結び初めたとはと、しきりにそんな考がお湧きになるのであるが、でも對面はよう遊ばされぬ。何と云つても、あれから年月も重なり、昔のことになつてしまつたのであるから、さう云ふ風な由縁を尋ねて未だに親しう出入りをするに云ふやうなことは、下々の人間のすることだのに、何でまゝ斯様な貴い御身分のお人達が、竝はづれたお附合をなさるのだらうなど、前々からのいきさつを深くも知らない女房達に、云はれたり思はれたりなさることも氣がお引けになるし、宮が絶えずお疑ひになつていらつし

やるのも、いよくお辛いし、それやこれやをお考へになるところから、いつからともなく餘所々々しうしておいでになつたが、君の方では先方がどうでおありにならうと、一向昔のお心持を變へずいらつしやるのである。

が、宮も浮氣な御本性からは、をりく歎かはしいお仕打をなさることがあるやうなもの、若君がたいそうお美しう、大きうおなりになるにつれて、外にはかう云ふ可愛いものを生んでくれる人はなさうなど、自然御大切にお思ひなされて、氣の置けない、なつかしいお人としては、誰方よりもいとしうして上げておいでになるので、一頃よりはいくらか心配もお減りなされて、落ち着いて暮しておいでになつたが、正月の元日が過ぎた頃にお渡りなされて、一つお年をお取りになつた若君をあやし給ひながら、お遊びになつていらつしやる晝つか

イ、上を薄紙で包んだ文で、後朝の御書などに用ふるもの
ロ、籠の、細み残した部分が、類のやうになつてゐるもの、多くは竹製であるが、これは金屬製と見える
ハ、白い紙で縦に包んだ文で、正式の書状に用ふるもの

た、小さい女童が、緑の薄紙で包んだ包文の大きなのに、小さい鬚籠を小松に着けたのと、別にもう一通、普通の立文とを持つて、遠慮もせずには走つて来る。と、やがてそれを女君に差上げるので、「それは何處から参つたのか」と宮がお尋ね遊ばすと、「宇治から大輔の君にと申して、使の人が持つて参りまして、勝手に分らずにうろ／＼致してをりましたので、いつものやうに上が御覧になりますこと、存じまして、私が受け取つて参りました」と、さう云ふうちも息をせい／＼弾ませ、て、「此の籠は金で拵へて、色を塗つたものでございますね。松も大層よく似せて、本物の枝にそつくりのやうに出来てをりますね」と、ここにこしながら云ひつゞけるのに、宮もお笑ひなされて、「どれ、私にも見せておくれ」と仰せになつて、お取り寄せにならうと遊ばされる。女君はひどく苦々しさうに、「それは大輔におやりなさい」と仰つしや

るのであつたが、お顔を赧くなさつたのを、宮は御覧遊ばして、もしや大將の君が、わざと何氣ないやうにして寄越した文ではないであらうか、宇治からと云つて来たのなども、何だかそれらしいところがあると、ふつとお氣づきになつたので、その文を取つておしまひなされて、それでもさすがに、いよ／＼さうであつた時はと、照れ臭くお感じになりながら、「開けてみますよ。後で文句を仰つしやらないで下さいましよ」と仰せになると、「まあ、見つともない。女房同士が取り交す内證の文などを、何で御覧になりますのでせう」と仰せられるのが、格別お騒ぎになるやうな風でもないのので、「では見ますよ。女房達の文の書き様は、どんな風なものなのか」と仰せながらお開けになる。と、たいそう若やかな筆蹟で、「御無沙汰申し上げてをりますうちに、年も暮れてしまひました。山里は何かと鬱陶しう、峰の霞の晴れる暇もご

さいませぬので」とあつて、端に、「どうぞこれを若君のお前に、つまらない品でございますが」としたゝめてあるのが、格別器用らしいところも見えないものゝ、誰が書いたともお心當りのない手なので、訝しうお思ひになりつゝも、今一つの立文の方を御覧になると、いかさま此れも女の筆で、「新しい年が参りましたが、如何でいらつしやいませるか。御自分様にも、さぞおめでたいお喜び事が数々おありでございます。此方はたいそう結構なお住居で、気分がしんみりと落ち着きますが、それでも矢張ふさはしからぬやうに存ぜられます。こんな工合にくよ／＼お考へになつてばかりお暮しになりますよりは、ときどき其方へお伺ひになつて、お氣晴らしをなさいましたらと思ふのでございませぬけれども、あの恥かしい、恐ろしい目にお懲りなされて、氣が進まないと仰せられて、お歎きになつていらつしやいます。それか

イ、正月初卯の日の祝に用ひて邪氣を拂ふもの。桃の木又は玉犀角象牙などで、一寸四方、長さ三寸乃至五寸ぐらゐの立方形を造り、縦に穴があつて五色の絲を貫き垂れる

ら若君のお前にと仰つしやつて、卯槌を進上なされますが、宮が御覧になりませぬ折にお目に懸けて下さいまし」と、年の始めに言忌もようしないで、縁起でもない泣きごとを長々と愚かしう書きつらねてあるので、繰り返し／＼、不思議さうに御覽遊ばして、「もう仰つしやつても宜しいでせう。誰の文です」と仰せになると、「以前山里で召し使つてをりました人の娘が、仔細がございまして、此の頃彼處に参つてゐると聞いてをりましたが、その者からでございます」と仰せられる。でも、どうも普通の奉公人とは受け取れない文の書きやうであるのと、「あの恥かしい、恐ろしい目」など、記した文句があるのを思ひ合せ給うて、さてはいつぞやのと、お心づき遊ばされる。それにしても卯槌が面白う、いかにもつれ／＼の人の仕業のやうに見えるのであるが、股になつた木の枝に、山橋の實を拵へて刺し通してあつて、さてその

枝に、

まだふりぬものにはあれど君がため

深きこゝろにまつと知らなん

イ、「またふり」と云へば「股になつた木の枝」の意味になる

取り立てゝどうと云ふ程の歌ではないが、あの忘れられない人のかとお思ひになると、おん眼が留まつて、「御返事をしてお上げなさい。放つて置かれるのはあなまりです。何もお隠しになるやうな文でもありませんまいに、どうして御機嫌がお悪いのでせう。では私は失禮しますよ」と仰せになつてお立ち出でになる。おん方は少將などを相手になさりながら、「困つたことになりました。あの小さい兒が受け取つたのを、どうして誰も見てゐなかつたのでせう」など、小聲でひそ／＼と仰つしやるのであつたが、「見てをりましたら、何でお前へなど參らせませう。いつたいあの兒は心なしの出過ぎ者なのでございますが、

人は行末がさぞと思ひやられるやうな、おつとりとしたところがありません方が宜しうございますね」など、憎まれ口を云ふのを、「まあ、幼い者を掴まへて怒るものではありませぬ」とお寤めになつていらつしやる。その兒と云ふのは、去年の冬、或る人が此方へ上げたのであるが、非常に顔だちが美しいので、宮もたいそう可愛がつておいでになるのであつた。

宮は御自分のお部屋へお戻りになつていらしつて、をかきなこともあつたものよ、大將が宇治へ通はれることは、久しい前からずつと續いてゐるとは聞いてゐるものよ、こつそりお泊りになることもあつたと人が云ふのを、いかに亡きおん方の形見のお住居だからと云つて、あゝ云ふ所に旅寢をされるとは餘りなことだと思つてゐたのだが、さてはあのやうな人を匿つてをられたのだなど、大方見當をおつけなされて、

大内記の官にある者で、御學問のことで出入りをさせていらつしやるのが、大將の君ともお親しう願つてゐるのを思ひ出し給うて、お前にお召し遊ばされる。と、やがて參つたので、韻塞おんさいきをなさるからと仰せて、詩集などを選び出して此方の棚へ積んでおくやうにお云ひつけなされてから、「右大將が宇治へ行かれるのは、此の頃も相變らずであらうか。立派な寺をお建てになつたと云ふ話だが、何とかして見に行けないものか知らん」と仰せになると、「左様でございます。たいそう貴く、嚴めしうお造りになりました、不斷の三昧堂のことなどにつきましても、有難いお申し付けがございましたやうに伺つてをります。尤もお通ひになりますことは、去年の秋ごろからは前よりも繁くなられましたやうでございます。下々の者が内々取り沙汰をいたしますのには、『女を匿かくまうておいでになる。満更でなく思し召すお人と見えて、

あのあたりの所々の御領地の者共などが、皆仰せを受けてお伺ひして、御用を承つてゐるが、それらにお云ひつけなされて宿直とくのちをおさせになり、京からも目立たぬやうに何かとお見舞をしていらつしやる。どう云ふ幸福さいふ人が、さすがに世間體を憚り給うて、あゝ云ふ田舎に淋しう暮していらつしやるのであらう』など、つい此の十二月しふげ頃に申してをりましたとやらでございます」と聞え上げる。よいことを聞いたとお思ひなされて、「その人が誰だと云ふことは聞かなかつたかね。前から彼處に住んでゐる尼をお訪ねになるのだと云ふ話だつたが」尼は廊の方に住んでゐるのでございまして、その人は今度お建てになりました方に、小ざつぱりした女房などを大勢置いて、相當に體裁よく暮してをられます」と聞え上げるのに、「面白いことだね。どう云ふ積りで、どう云ふ人をそんな風にして置かれるのであらう。矢張なされ方に趣

があつて、普通の人とは料簡が違つてをられる。左大臣などは、あの方があまり佛道にお凝りになつて、どうかすると夜も山寺に泊つたりされるのは軽々しいことだと、非難しておいでなのやうに聞いてゐたし、いかにも、佛道のためなら何もあのやうに忍んで歩かれることはない、あれは矢張昔の人の故郷に心を惹かれておいでなのだ、云ふやうな噂もあつたけれども、實はさう云ふ譯だつたのだね。どうだ、人よりは眞面目だと云はれて賢人ぶつてゐる人間が、却つて世間が思ひも及ばない内證事をしておいでではないか」と仰せになつて、大層興あることに思し召される。此の内記は、かの大將殿に親しうお仕へ申してゐる家司の聲に當る者なので、自然さう云ふ祕密のことも聞いてゐるらしいのであつたが、宮はお心の中に、どうしたらその人がいつかの人だと云ふことを、確かめることが出来るであらう、あの君がさう迄

イ、正月十八日の
宮中のおん儀、
旬宮一〇一頁頭
註参照
ロ、正月廿一日の
おん儀、紅葉賀
七四頁頭註参照

にして匿うて置かれるからには、竝大抵な人ではあるまいが、それにして内の人と懇意な間柄なのは、どう云ふ引つかゝりなのであらう、などとお考へになると、大將の君とおん方とが氣脈をお通じになつてその人を隠していらつしやることなども、ひどく妬ましくおなりなされて、此の頃はたゞそのことばかりを思ひ詰めておいでになる。賭弓だの内宴だのと云ふことが済んでしまふと、何の御用もおありにならないし、除目などで人々が騒いでゐても、御自分は一向さう云ふ方には係合がおありにならないので、忍んで宇治へお渡りになることばかりをお考へになつていらつしやつたが、此の内記は立身の望みを抱いて、何とかして御意に入るやうにと、夜晝心を碎いてゐる頃なので、例になく目をかけておやりなされて、「どんなにむづかしいことでも、私の云ふことなら計らつてくれるであらうか」と仰せられるのに、

畏つてお受け申し上げる。と、「妙なことを云ふやうだけれども、その宇治にゐると云ふ人は、ずうつと前に私がちよつと見たことがあつて、その後行くへが知れなくなつてゐた人なのを、大將が捜し出して引き取つてをられるらしく、思ひ合されるふしがあるのだ。でも本當のことを突き止める術がないので、物蔭から覗くなり何なりして、さうに違ひないかどうか見定めたいと思ふのだが、微塵も人に感づかれないでさうするには、どうしたらよいであらうか」と仰せになるので、これは厄介なことになつたと思ひながらも、「おいでになるのでございまして、えらく険しい山越えをなさらなければなりません、格別遠い道ではございませぬから、夕方お出ましになりまして、亥子の刻にはお着きになるでございませう。そして明け方にお歸りになりまして、知る者と申しては、たゞお供を申し上げた者共ばかり。それと

い、亥の刻から子の刻までの間、今の午後十時から十二時

て深い事情などは分る筈がございませぬ」と申し上げるのに、「さうであらうとも、彼處は私も以前一二度行つたことのある道なのだが、いかにも軽々しいやうに云はれはしないかと思ふので、世間への聞えを憚つてゐる譯なのだ」と仰せられる。そして御自分のお心でも、返す返すもしてはならないことのやうにお思ひになるのであるが、此處まで話を進めておしまひになつたのでは、止めることもお出来にならないので、お供には、昔彼處の勝手を知つてゐた者が二三人と、此の内記と、それにおん乳母の子の、今度藏人から五位に敘爵された若い男など、氣心の分つた者ばかりをお選びなされて、今日明日のうちなら大丈夫大將はお越しにならないでございませうと、内記によく様子をお聞きなされてから、お立ち出でになるにつけてもあの頃のことがお胸の中に浮んで来る。ほんに、あの時分は、不思議なくらゐる氣が合つ

て、自分を手引してくれたものなのに、その人に對して後ぐらいことをするやうになつたもの哉と、さまざまに思ひ出され給ふのであつたが、都の中でさへ無闇なお忍び歩きなどは、さうは云つてもお出來に
ならないお身の上であるのに、怪しうお姿をお窺しなされて、お馬でお出かけになるおん心地も、空恐ろしう氣が咎めるやうにお感じになるものゝ、物好きと云ふ方は竝外れていらつしやる御性分ごせうぶんであるから、
山深く分け入り給ふにつれて、さてどうであらうか、折角行つても顔も見ずに歸つて来るやうであつたら、どんなに淋しく、手持無沙汰であらうなどゝ、だん／＼そんな風にお考へなされて、胸騒ぎをお覺えになる。

法性寺のあたり迄は御車みくるまでおいでになり、そこからはお馬に召されたのであつたが、道をお急ぎなされたので、宵が過ぎた時分にお着きに

なつた。内記は勝手をよく知つてゐるかの殿のおん内の人に聞いておいたので、宿直人とくのちかびとのゐる方には寄らないで、葦垣で圍つてある西面にしやうめんを、
そうつと少し毀こぼして中に這入つた。さすがに自分もまだ初めての場所であるから、まご／＼しながらも、人目も少いことであるから、なほも奥へ忍んで行くと、寢殿の南面にほの暗い灯影が見えて、こそ／＼と音がしてゐるので、一度お前へ戻つて来て、「まだ起きてゐるやうでございませ。ついでからお這入り遊ばしませ」と云ひながら、先に立つて行つてお入れ申し上げる。宮はこつそりとお上りあがになつて、格子に隙間のあるところをお見つけなされて、その方へ寄つていらつしやると、伊豫簾いよすだれがさら／＼と音を立てるので、覺えず息をお殺しになつたが、やう／＼普請が出来上つたばかりの御殿であるから、新しく清々すがすがしくはありながら、まだ細々こまかした所までは手が届かないで、方

イ、東屋の巻に見
える右近は宮の
おん方の女房で
あるが、別に浮
舟の方の女房に
も右近と名のる
者があつて、二
條院で宮が押入
り給うた時に、
そこに待つてゐ
たのだと見える

浮舟
三三
方が透いてゐるのを、まさか覗きに來る者もあるまいと云ふ油断から、
塞ぎもせずにあるのであらう。几帳の帷を上へ弾ね揚げて、横の方へ
押し退けてあつて、灯をあか〜と燈した蔭に、三四人の女が物を縫
つてゐるのであるが、その傍で可愛い女童が糸を燃つてゐるのは、い
つぞや灯影で御覽になつたことのあるあの顔に紛れもない。ひよつと
して、咄嗟の場合の見間違ひかともお疑ひになつたが、右近と名のつ
てゐた若い女房の顔もある。かの女君は腕を枕に横になつてゐて、じ
つと灯の方を見守つてゐる眼つき、髪の垂れかゝつた額つきなど、た
いそう上品に、なまめかしう、對のおん方に非常によく似てゐる。と、
その右近が縫ひ物に折り目をつけながら、「かうしてお出ましになりま
したら、急には此方へお歸りになれないでございませう。殿は此の程
の除目が濟んでから、一日頃には必ずお越しになりますでせうと、昨

日のお使も申してをりましたが、おん文には何とございましてやら」
と云ふのに、返事もしないで、えらく考へ込んでゐる様子なので、「殿
がお越しになります矢先に、逃げ隠れをなすつたやうに見えますのが、
體裁がお悪くはございますまいか」と云ふと、向う側にゐる女房が、
「それは斯様々々でお出ましになりますと云ふことを、殿のおん許へお
知らせなされたが宜しうございませう。さうでもなくて、黙つてお立
ちになりますやうな輕々しいことが、どうしてお出来になりますせう。
そして御參詣をお済ましになりましたら、早速また此方へお歸り遊ば
しませ。こゝは淋しいやうでございませうけれども、氣がねのいらぬ、
のんびりとした暮しをさせて戴きましたので、都の方が却つて旅のや
うな氣持が致しませう」など云ふ。するともう一人が、「矢張當分は
此處においでになりますして、とき〜殿がお越しになりますのをお待ち

ち受けになりました方が、落ち着きがおありになつて、體裁もお宜しくはございますまいか。いづれそのうちには、京へお迎へ申されるやうになりますでございませうから、さうなつてから御ゆつくりと親御様にもお會ひなされませ。いつたい婆殿があまり氣早でいらつしやるので、かう急なことを思ひ立たれたのでございませうが、昔も今も辛抱づよい、氣の長いお人の方が、結局は仕合せな目を御覽になります。など、云ふのに、右近がまた、「なぜあの婆が京へ行かれますのをお止めしなかつたのでせう。全く年を取つたお人は、むづかしいことを申すものですね」と憎らしさうに云つてゐるのは、大方乳母のことか何ぞを誹つてゐるのであらう。さう云へば、ほんに、乳母らしい意地の悪い女がゐたものと、あの時のことをお思ひ出しになつても、宮は夢のやうな心地が遊ばされる。女房達はなほも聞き苦しいまでにいる

イ、句宮は夕霧左大臣の六の姫君の聲でもあらせられる

いろな内輪話をして、二條院のおん方が一番お仕合せでいらつしやいますね。左の大殿のおん方も、父大臣があのお威勢でおん後見を遊ばして、躍起になつていらつしやいます。若君がお生れになりましてからは、彼方のおん方が此の上もないおん覺えていらつしやいます。それと云ふのも、内の婆殿のやうな出過ぎたお人がいらつしやらないで、お心のどかに、お上手に取りなしをなさるからでせうね」と云ふと、「姫君だとして、殿さへお心變りをなさらずに、いとしがつてお上げになつたら、あれにお負けになるものですか」と云ふのに、女君が少し起き上つて、「まあ聞き辛い。餘所の人となら何と云つて比べてくれないでも構ひませぬが、宮のおん方のおんことなどを、假にも引合に出してはなりませぬ。そんなことが彼方へ聞えたら困りますからね」などと云つてゐる。それにしても此の人は、かのお人とどれ程の親族なの

であらう、たいそう顔だちがよく似てゐるやうだがとお思ひになりながら、比べて御覧になると、奥床しくて、上臈らしいと云ふ點では、かのお人の方が遙かに優れておいでになり、これはたゞ可愛らしう、一つくゝの目鼻だちがいかにも美しいのである。が、たとひ器量に缺點があるとお感じになつても、あれほど逢ひたがつていらした人をおん眼の前に遊ばしては、そのまゝお濟ましになる御性分ではないのであるから、まして仔細に御覧になるにつれて、何としたらこれを手に入れることが出来ようかと、たゞもう思案にお暮れになる。恐らく此の女は、物詣でに行くところなのであらう、それに親はあるのであらう、とすると、今こゝで逢はなかつたら、いつ又そんな時が廻つて来よう、さうかと云つて、今宵のうちにどうすることが出来るであらうと、心も空におなりになりながら、なほ見守つておいでになると、

右近が、「あゝ睡た、昨夜もうつかりして、夜を明かしてしまつたんですものね。これはまあ明日の朝早くでも縫ふことにしませう。お急ぎになると仰つしやつても、どうせお迎への御車が来るのは、日が高くなつてからでせうから」と、しかけた縫ひ物を取り集めて、几帳に打ち懸けたりして、うたゝ寝のやうな恰好をして物に凭りかゝると、女君も少し奥の方へ行つて横になる。右近は又起きて、北面へ行つたが、暫くすると戻つて来て、女君の裾の方に近寄つて寝る。睡たがつてゐたことであるから、直ぐもうすやくと寝入るらしいのを御覧なされて、外になさりやうもないまゝに、その格子を忍びやかにお叩きになつたが、右近が聞きつけて「誰方」と問ふので、咳拂ひをしておやりになると、お聲の工合で貴いお方であると察して、殿がお越しになつたのかと思ひながら起きて来た。「先づ此處を開けておくれ」と仰せ

になると、「でもまあ、妙な時分においでになつたのでございますね。夜もえらく更けましたでございませうに」と云ふのであるが、「何處ぞへお出かけになるらしいと仲信が云ふものだから、驚いて出て來ただけれど、お蔭でひどい目に遭うた。まあ開けておくれ」と、非常にお上手に大將殿にお似せなされて、而も小聲で仰せられるのに、宮とは思ひも寄らないで開けてしまふと、「途中で悪者に襲はれたので、見苦しい姿をしてゐるのだ。明りを暗くしておくれ」と仰せになるので、大變なことだと慌て惑うて、取り敢へず灯を遠くの方へ片寄せる。と、「私の様子を人に見せてはいけないよ。來たことを云つて、皆を起してはならないよ」などと、そこは巧者なお方であるから、もと／＼少し似ておいでになるお聲を、かの殿にそつくりのやうに真似て仰せになりながらお這入りになるので、恐い目に遭うたと仰せになるからには、

どのやうなお姿におなりなされたことであらうと、おいとほしう存じ上げながら、自分も物蔭に隠れてお拜み申し上げると、たいそう華奢に、なよ／＼と装束をお着けになつて、炷きしめていらつしやる香の匂の妙なこともお變りにならないのが、近う寄つておいでなされて、物馴れ顔におん衣などをお脱ぎになるので、「いつもの御座へおいで遊ばして」などと申し上げるけれども、物も仰せられないのに、おん夜着などを差上げて、あたりに寝てゐた女房たちを起したりして、少し引き退つて、皆で寝てしまつた。

大將がお越しになる時でも、お供の衆は別な所で休息してゐて、この人達とは顔を合さないのが例であるから、今宵にしても誰も訝しむ者はゐない。中には又、「かう云ふ夜更けにお渡りになりますとは、何と云ふお優しさでいらつしやいませう。姫君には此のお心持がお分り

になりまますまいね」など、生意氣を云ふ者もあるのに、「お静かになさいまし。夜はひそ／＼聲が却つて耳につきまますから」など、右近が云つたりして、やがてひつそりとしてしまふ。女君は違ふお人であつたと氣がついたので、あまりのことに驚き呆れてゐるのであつたが、宮は聲をさへお出させにならない。いつぞや人目のある所でさへも、御無體ごむたいなお心でいらしつたのであるから、今は一層ひたむきにならせ給ふのであるが、別なお人だと云ふことが初めから知れてゐたのなら、少しは手強てづかいあしらひも出来たであらうものを、さうではないのでただ夢のやうな心地がしてゐると、あの折はくやしい思ひをなすつたと、あれからずつと慕ひつゞけていらつしやることなどを、だん／＼とお口説き遊ばされるので、さては宮でいらしつたかと分るにつけても、いよ／＼恥かしう、かのおん方の思し召すところなどを考へても、

イ、戀ひ死なんの
ちは何せん生け
る日のためこそ
人は見まくほし
けれ拾遺集
萬葉集には下の
句「ためこそ妹
は見まくほりす
れ」とあり

今更せん術がないまゝに、際限もなく泣いてゐるばかり、宮もなまなかお逢ひになつたものゝ、此の後相見ることが容易でないのをお思ひなされて、お歎き遊ばされるのであつたが、さうするうちにも夜は遠慮なく明けて行く。お供の人々もお迎へに来て咳拂せきほぎひをする。右近もそれを聞きつけてお前に參る。でもまだ歸らうと云ふお心にはおなりになれず、いつ迄も残り惜しう、あはれに覺え給ふばかりか、再びお越しになることもむづかしいやうな氣がなさるので、よしや都で自分の行くへを捜し求めてゐようとも、今日だけは此處にかうしてゐよう、何事も「生ける限りのため」ではないか、此のまゝ別れを告げたのでは、戀しさに死んでしまふであらうとお思ひなされて、右近をお召し寄せになつて、「ひどく氣が利かない者になりさうだけれども、今日は歸ることが出来さうにもない。供の者共は何處か此のあたり近い所に、

巧く隠れて待つてゐるやうに。時方は京へ歸つて、山寺に籠つてゐるとでも、然るべく取り繕つておいてくれるやうに」と仰せになるので此れも始めて心づいて茫然としながら、ほんに不注意であつた昨夜の自分の失錯を思ふと、氣が遠くなるやうに感じるのであつたが、やうやうじつと取り靜めて、もうかうなつたらいくら騒いでみたところで何の甲斐もないことだし、失禮でもある、此の間二條院であゝ云ふことがあつた折に、すつかり打ち込んでおしまひになつたと云ふのも、結局かうならずにはいらつしやれないおん宿世だつたのだ、誰のせむと云ふ譯でもないのだと、我と我が心を慰めながら、「今日は母君が迎へを上げると仰つしやつてございしましたが、何と遊ばさうと云ふのでございませう。お逃れになれない御宿縁がおありになりました、斯様にならせられましたことは、私共がとやかう申し上げるところはご

ざいませぬが、たゞ折が悪うございます。今日だけはお歸り遊ばしにして、お志がおありになりますなら、又ゆつくりとお越しになりますたら」と聞え上げるのに、大人しいことを云ふよとお思ひになりつゝも、「長い間此の君のことを思ひつゞけで、頭がぼんやりしてしまつたので、人が何と云はうが、外のことは耳に這入らなくなつたのだ。少しでも身分と云ふことを考へるものなら、かう云ふ風な忍び歩きを思ひ立つたであらうか。迎へが來たら、今日は物忌でございませうとでも挨拶をして歸すがよい。私があることを人に知られないやうにする工夫を、誰のためでもあると思つて考へておくれ。その外のことには何に依らず聴き入れないから」と仰せになつて、此のお人を云ひやうもなぐいとしうお感じになる餘りには、どのやうな誹りをもお忘れになりさうな御様子なのである。

右近は出て来て、此方へお伺ひ申し上げたお供の人々に、「斯様々々に仰つしやつておいでなのですが、矢張それではえらい不都合だと云ふことを、あなた方からもよく聞え上げて下さい。あまり突飛なおん振舞は、たとひ御本人はさうなさりたがつていらつしやいまして、そこはお附の方々の梶の取りやうだと存じますのに、何でまあかう輕はずみに、こんな所へ御案内なすつたのでせうか。失禮なことを申し上げる山樵などがをりましたら、どうなりませう」と云ふので、内記はほんに厄介な事だと思ひながら立つてゐる。「時方と仰つしやるのは誰方ですか。これ／＼のお言葉ですが」と、さつきの仰せを傳へると、その時方と呼ばれたのも笑ひながら、「あなたのお叱言が恐ろしうございますから、仰せがなくても逃げて歸ります。いや、ほんたうは、竝竝ならぬ御執心の御氣色を拜みましたので、私共は誰も／＼身を捨

てる覺悟でお供をしたやうな譯なのです。さあ／＼、もう宿直人も皆起きたやうだし、見付からないうちに」と云つて、慌てゝ出て行つてしまふのである。右近は人に知らせないやうにするには、どう云ふ風に謀つたらよいかと、途方にくれながら、折柄女房達が起きて來たのに、「殿は仔細がおありになると見えまして、たいそう人に見られるのを厭うておいでになりますか、大方途中で追剝にでもお遇ひになつたのではないでせうか。お召物なども、夜になつてからさうつと持つて參るやうに、仰せつけになりました」など、云ふのであつたが、「まあ恐いこと。木幡山は世にも物凄い山だとか云ひますのに、いつものやうにお先拂ひもおさせにならないで、お忍びでお通りになつたのでせうね。ほんたうに飛んでもない」など、人々が云ふのを、「しつ、もしちよつとでもそんなことが下人の耳に這入りましたら、えらいことで



す」と、寤める間も氣が氣でなく、かう云ふ折に生憎殿からお使でも來たら、何と云はうかと思ふにつけても、南無初瀬の觀世音、今日一日を無事に過させ給へと、心のうちに大願を立てたりしてゐる。いつたい今日は、都の母君が石山に參詣をさせると云ふことで、迎へを寄越す筈になつてゐたので、女房達も皆精進をして、體を淨めて待つてゐたのが、「それでは今日はようお出ましにならないでせうね。まあ惜しいこと」など、云ふうちに、やがて日が高く昇つて來たので、格子などを上げて、右近がお側近いあたりにお附き添ひ申してゐるのであつたが、母屋の簾は皆おろしてしまつて、「物忌」など、書かせた紙を下げさせてあるのは、もし母君が自分で迎へに見えた時に、内へ這入つて來られないやうにと云ふ用心から、「昨夜の夢見が悪かつたので」と云ふことにしてあるのであつた。

お手水の水などを參らせる様子は普通だけれども、まだいろ／＼のおん調度などが揃つてゐないのに興をおさましになりながら、「先づあなたから顔をお洗ひになりましたら」と仰せられるのであつたが、女君は大將の君の、御尋常に取り澄ましていらつしやるお人柄を見馴れてゐたのに、これは又、片時も逢はずにいらつしやつたら死にもなさりさうに焦れ給ふのに、いかさま、情が深いと云ふのは斯様なお方のことであらうかと、始めて合點が行くにつけても、何と云ふ不思議な廻り合せの身なのであらう、もしこんなことが彼方此方へ聞えたら、どうお思ひになるか知らんと、先づ第一に宮のおん方のお胸の中をお察し申し上げてゐる。宮はいまだに誰ともお分りにならないので、「返す返すも氣が／＼ですから、矢張ありのまゝに仰つしやつて下さい。たとひあなたが賤しい下司の子でいらつしやつても、ます／＼いとしく

なるばかりです」と無闇におせがみになるのだけれども、それにだけはさつぱりお答へしようとしなくて、その外のことにはたいそう如才なく、打ちとけた御返事なども申し上げ、すつかり素直になつてゐるのを、此の上もなういぢらしう御覽になるのである。日がたけた頃に京からの迎へが来たが、車を二輛引いて、馬に乗つた、例の無骨な者共が七八人、供廻りの男を大勢つれて、品の悪い恰好でがや／＼しやべりつゝ這入つて来たので、女房達は當惑しながら、「彼方に隠れてゐるやうに」と云はせなどする。右近は、さて何と云つて断つたものであらうか、殿がいらしつておいで々すなど、云ひ拵へても、あれ程のお方が京においでかおいで々ないかは、自ら知れてゐる筈であるから、謹が分つてしまふであらうと案じたりして、朋輩達にも殊更相談などをしないで、「實は昨夜から月の障りがおありになりまして、残念なこ

イ、春霞たなびく
山の櫻花見れど
も飽かぬ君にぞ
ありける〔古今
集〕

とだと仰せになつていらつしやいましたところ、夢見などもお悪うございましてから、今日だけはお慎み遊ばすやうに申し上げましたので、物忌をなすつていらつしやいます。返す／＼口惜しうございますけれども、何か、邪魔をしてゐるのではございますまいか」と、文を書いて、その人達に物を食はせて歸すのであつたが、辨の尼にも、「今日は物忌で、お出ましになりませぬ」と云はせに遣る。女君はまた、いつもは霞む山際を眺めながら、どうして時を過したらよいかと屈托してゐるのが常であるのに、今日ばかりは日が傾くのを歎いてばかりいらつしやる宮のお氣持に惹かされて、たいそうあつけなく暮れて行くやうに思ふのであつたが、此のうら／＼とした長閑な春の日に、「見れども飽かぬ」感じのする顔だちの、愛嬌に充ちた、なつかしみのある、何處にも此れと云ふ缺點のない美しさ。尤もあの對のおん方から見れ

ば劣つてゐるし、大殿のおん方の、今を盛りのおん色香に比べても、遠く及ばない程の器量ではあるが、心から打ち込んでおいでになる折柄なので、世に二人とない人だとばかりお思ひになるのである。女君とても、大將殿を非常にお綺麗に、又かう云ふお方があらうかとお眺め申してゐたものゝ、すつきりとして、阿娜めいていらつしやることは、ずつと此の宮の方が優つておいでになるやうに思ふのであつたが、硯をお引き寄せになつて、手習などをなさりながら、たいそうお見事に字をお書きになつたり、繪などを面白くお書きなされたり遊ばすのを見ると、さすがに若い女心では、此の方へ移ろひもするであらう。と、「もし思ふやうにならないで、ようお訪ねしないやうな時には、これを見てゐて下さいよ」と仰せになつて、可愛らしい男と女とが寄り添うてゐる形を描き給うて、「いつもかうしてゐられたら」などと、仰

せになりつゝもおん涙をお落しなされて、

「長き世をたのめてもなほ悲しきは

たゞ明日知らぬいのちなりけり

かうまで思ふやうになつたのは、恐ろしいことです。とても心のまゝにならぬ體ですから、此れからお逢ひするためには、どんなに苦しい首尾をしなければならぬか、その懐れたさを考へると、ほんたうに死ぬやうな氣がします。いつぞやあんな情ないお仕打をされながら、何でなまじひにお訪ねしたとか」など、仰せられる。女君も男君がお濡らしになつた筆を執つて、

こゝろをば歎かざらまし命のみ

定めなき世とおもはましかば

と走らせるのに、さては心變りをしたら恨むつもりなのであらうと、

御覽遊ばされるにつけても、ひとしほいぢらしうおなりなされて、「どう云ふ人に心變りをされた覚えがあるのですか」など、お笑ひになるのであつたが、大將の君が始めて此處へ連れて來られたそも／＼のいきさつなどを、頻りに聞きたがつてお尋ねになるのに、「よう申しませぬことを、そのやうにお責めになりますとは」と、苦しがりながら打ち怨じる様子の若々しさ。宮もそのことは、いづれ知れずにはゐないのであると分つていらつしやりながら、どうしても口を割らせたくお思ひになるのは、是非もないお心なのであつた。

イ、時方のこと

夜になつてから、京へお遣しになつた大夫が參つて、右近に會うて、「后宮からも御使がお見えになりましたして、「左大臣も機嫌を悪くしてをられます。人に隠して外出歩きをなさるのは、非常に軽々しくもあり、間違などもありがちですのに、もしそんなことをお上が聞し召しまし

たら、私の立ち場がないやうになります」と、殿しいおん仰せでございました。尤も、「東山へ聖に會ひにいらつしやいました」と、人には申しておきましたか」など、語つて、「女のお方は罪が深うございますね。何でもない端の者を迄まご／＼させて、讒をさへおつかせになるのですから」と云ふので、「聖の名まで引合ひにお出しになつたのは、本當にようございましたね。それで宮の罪もお消えになります。でもまあ、どうしてあゝ云ふ妙な辯をお覚えになりましたのか。さうならそのやうに、前に知らして戴いてをりましたら、あまり勿體ないことですから、何とか外にお逢はせ申す手だてを考へましたものを、ほんに無關なおん歩きをなさるのですね」と合槌を打つたりして、さてお前に參つて斯様々と聞え上げるのに、いかさま、京ではどんなにお案じ遊ばしておいで、あらうと思ひやり給ひながら、「窮屈な身の上

は辛いものです。暫くでもよいから、もつと軽々しう振舞へるやうな殿上人にでもなれないか知らん。ほんたうにどうしたらよいと云ふのか、さういつ迄もこんな工合に人目を憚つてはゐられませぬし、大將にしてもどのやうな感じを持たれるでせうか。もと／＼親しかるべき仲ではありますが、昔から訝しい迄に睦じうしてゐましたものが、その間柄を裏切るやうな心を持つてゐたと知れたら、恥かしいことです。それにまた、世の譬へにも、己れの過ちは棚に上げて人を責めると云ふことがありますから、たまにしか逢ひに来て上げない御自分の情なさを考へずに、あなたをお恨みにでもなつたらと、そんなことまで氣にかゝります。何にしましても、夢にも人に知られないやうな風にして、何處かこゝでない所へお連れ申したいものですね」と仰せになるのであつたが、今日も此のまゝお泊りになると云ふやうなことは、お

イ、袖かざりし袖
の中にや入りに
けんわが魂のな
きこゝちする
〔古今集〕

出来になる譯のものではないので、お立ちにならうと遊ばすにつけても、御自分の魂は戀しい人の「袖の中に」留めてお置きになるでもあらう。と、「夜が明けてしまひませぬうちに」と、人々が咳拂ひをしてお急ぎ立て申し上げるので、妻戸のところまで御一緒に連れておいでなされて、ようお出ましにならないで、

世にしらず惑ふべきかな先にたつ

涙もみちを掻きくらしつゝ

女君も、云ひやうもなく悲しう覺えて、

涙をも程なき袖にせきかねて

いかに別れをとゞむべき身ぞ

風の音もひどく凄じい、霜の深い明け方に、「おのがきぬ／＼」も冷たくなつたやうな心地がなさりながら、お馬にお乗り遊ばしても又引き

ロ、しのゝめはほ
がらほがらと明
けゆけばおのが
きぬ／＼なるぞ
わびしき〔古今
集〕

返していらつしやりさうに焦れ給ふのだけれども、お供の人々がそんなうか／＼してゐる場合ではないと思つて、たゞもう急ぎに急ぐので我にもあらずお出ましになる。内記と時方と、お馬の口には二人の五位がお付き添ひ申してゐたのが、険しい山を越えてしまつてから、自分達もめい／＼馬に乗つたが、汀の氷を踏み鳴らす蹄の音さへ、心細く物悲しい。さう云へば、昔も宇治通ひを遊ばした時だけ、かう云ふ山越えをなすつたことがおありになるので、不思議な因縁のある山里よとお思ひになるのであつたが、二條院にお着きになつても、あの人の居所をお隠しなされたおん方を恨んでおいでになるので、御自分のお部屋へいらつしやつて、大殿籠り遊ばされる。が、さすがにお寝つきになることが出来ず、お淋しいあまりにいろ／＼のことがお胸に浮ぶので、矢張お心弱くおなりなされて、對にお渡り遊ばすと、何事も

御存知なさらずに、麗しいお顔つきをしておいでになるのに、珍しく美しいと御覧なされたあの山里の人よりも、これはまたひとしほ類稀なやうにお眺めになるのであつたが、でも此のお顔によく似てゐたとお思ひになると、又戀しさで一杯におなりになるので、ひどく鬱々とした御様子で、御帳にお這入り遊ばしてお寝みになる。

女君をも御一緒に連れてお這入りなされて、「たいそう氣分が悪いのですが、此のまゝどうかなるのではないかと、心細くてなりませぬ。私がいくらあなたのことをおいとしう存じ上げてゐたとしても、死んでしまへば直ぐもうあなたはお變りになるのでせうね。人の一念と云ふものは必ず徹るものなのですから」と仰せになると、怪しからぬことを真顔で仰つしやるものかなとお思ひなされて、「そんな外聞の悪いことを仰せになつて、もし先方へ聞えましたら、私がか好い加減なこ

とをでも申し上げてゐるやうに、彼方でお思ひになりますのが辛うございませう。心配事の多い身は、ふとした御冗談を伺ひますのさへ苦しうございまして」と仰せになつて、お顔を背けておしまひになるので、宮も眞面目におなりなされて、「でもほんたうにお恨み申してゐることがあつたとしましたら、どうお思ひになりますか。憚りながら、私はあなたのおためには随分盡して上げてゐますし、世間の人も度が過ぎるやうに云つてゐる程ではありませんか。それにあなたは、私と云ふものを大將よりはずつと下に見ていらつしやるらしい。それもさう云ふ前世からの約束事なら、諦めもしませうけれども、隠し立てをなさるお心がおありになるのが、溜らなく情ないのです」と仰せになりながら、それでも淺からぬ因縁があつたればこそ、あの居所を探りあてることが出来たのだとお思ひなされて、涙ぐんでおいでになるのに、

女君はまた、さうむきになつていらつしやるのがおいとほしう、どう云ふことをお聞き込みになつたのか知らんとお驚きになりながら、何とおん答へをなすつてよいかも分らずにいらつしやる。いつたい御自分が私にお逢ひになつた初めが、ほんのお戯れのやうであつたので、誰もがさうであるやうに、手軽に御推量なさるのであらうか、ほんに、よしないお人に媒介をして戴いて、その親切を嬉しう存じ上げたりしたのが間違のもとであつたのだ、そして結局御寵愛の衰へる身になつたのだと思ひつゞけ給ふと、いろ／＼と悲しうおなりなされて、ひとしほいちらしう、萎れておいでになるのであつたが、それと云ふのが、宮はかの人をお見つけになつたことを當分祕密にしておかうと云ふお考から、外のことに託けてお恨みになるのに、此方はさうとお察しになる由もなく、全く大將の君との間を、本氣で疑つていらつしやるの

だとお思ひなされて、誰か根もないことをまことしやかに聞え上げた者があるのではないか、など、云ふ氣がなされるにつけても、そんな告げ口をした者がゐたかどうかをお突き止めにならないうちは、お顔を見られ給ふのも面映うお感じになるのであつた。

内裏から中宮のおん文がおありになつたのに、宮はお驚き遊ばして、まだお心がお解けにならないおんけはひで寢殿の方へお渡りになつたが、「昨日お見えにならなかつたので、お上もお案じ遊ばしていらつしやいます。お宜しかつたらお上りになりますやうに、久しうお會ひませぬから」など、云ふ仰せ言であるのに、又しても御心配をおかけ申されるのを恐れ多くお思ひになりつゝも、ほんたうに御氣分もお悪いやうなので、その日は御參内もなさらないで、上達部などが大勢お伺ひしたけれども、御簾のうちでお過し遊ばされる。と、夕方右大將

がお渡りになつたので、「どうぞ此方へ」と仰せになつて、打ちくつろいで御對面になるのであつたが、「御病氣のやうにお聞き及びになりまして、中宮もたいそうお心にかけておいでになります。どんな御容態でいらつしやいますか」と聞え給ふのに、その御様子を御覽になるなりいよ／＼胸騒ぎが遊ばすので、お言葉少なにおあしらひなされて、さても此のお人は、聖めてゐるとは云ひながら、餘りな脱俗ぶりであることよ、あんなしをらしい人を圍つておいて、めつたに訪ねても上げないで、待ち侘びさせるとはと、お思ひになつていらつしやる。いつもはちよつとしたやうなことの折にでも、御自分から實直者よと名告つてお出になるのを忌ま／＼しう思し召されて、何とか彼とか云ひ負かし給ふのが常であるから、ましてかう云ふ内證事をお見つけになつたら、どんなにかお責めになるであらうものを、今日はなか／＼

左様な御冗談なども仰せにならず、たいそうお苦しうにしていらつしやるので、「困つたことでございますね。大してお悪いと云ふのもなしにいつ迄もお直りにならないのは、却つてお宜しくありませぬ。何卒お風邪をお大事に遊ばして」など、親身に聞え上げ給うてお出ましになるのに、さりとは奥床しいところのあるお人よ、あの山里の人は、此の君と比べて自分をどう云ふ人間に見たであらうと、何につけてもたゞそのことばかりを、片時も忘れずにお思ひ出しになる。かのあたりでは、石山詣も中止になつて、たいそうつれづれな月日を送つてゐる。宮からは、ひどく焦れておいでになることを何や彼やと書き集め給うて、お遣しになるのであるが、そのおん文をお届けになるのさへ容易でなく、あの時方と云つた大夫の従者の、何も事情を知らない者をお選びなされて、お使にお差立てになる。それをまた右近

は、自分に古い馴染の男があつたのが、此の頃殿のお供をして来て久しぶりに出遇うたので、昔の仲を取り戻さうとしてゐるのだと云つたりして、朋輩の手前を取り繕ふと云ふ風に、萬事を引き受けて、臆をついて行くのである。かくてその月も過ぎてしまふのに、お胸の中はどんなにやきもき遊ばしても、なか／＼お越しになることはむづかしいので、こんな工合に物思ひばかりしてゐるのでは、とても命がつづかないであらうと、心細さへ取り添へ給うてお歎きになつていらつしやつたが、一方右大將殿は、少しお手すきにおなりなされたので、例の忍んでお渡りになつた。先づ寺の方へお詣りになつて佛などをお拜み遊ばされ、御誦經をおさせになつたり、僧に布施などをなすつたりして、夕方に女君のあたりへ、こつそりおいでになるのであつたが、これはさう無難にはお姿をお獲しにならず、烏帽子に直衣をお召しな

された、申し分のない小ざつぱりしたおん扮装で、歩み入り給ふおん
けはひからして奥床しう、いかにもお嗜みの深いところがおありにな
るのに、女君は何としてお目に懸れようぞと、空が見てゐるのも恥か
しう、恐ろしう覺えるのに加へて、あの御無體に遊ばした宮のおん有
様を思ひ出すと、又此の君にお逢ひしなければならぬのが、溜らな
く感じられる。さう云へばあの時、「年久しう契りつゞけてゐた人たち
が、皆厭になつたやうな氣がします」と仰せになつていらしたたでは
ないか、そして本當にそのお言葉の通り、あれからは御氣分がお悪い
と仰つしやつて、おん方々のおん許にもお通ひにならず、御修法など
をさせていらつしやるさうではないか、にも拘らず、此の身が殿にお
逢ひしたとお聞きになつたら、どんな氣持がなさるであらうと、ひど
く苦しう思ふのであるが、さればと云つて、此の大將の君にしても、

竝々ならぬ氣品を備へておいでになり、なまめかしい様子をしていら
しつて、長いことお見えにならなかつた言譯などを遊ばすにも、お言
葉少なに、戀しいだの悲しいだのと切なく仰せにはならないもの、
始終お逢ひになることの出来ない遣る瀬なさを、程よく匂はし給ふの
が、千萬言を費すよりは一層強く人の心を感動せしめると云ふやうな
何かさう云つたお人柄でおいでになる。阿娜つぽいと云ふ方面は不足
していらつしやるとして、末長くお縫り申し上げるのに、いかにも頼
もしうお見えになる點などは、宮よりずつと優つておいでになるにつ
けても、思ひの外に心變りをしたことなどがお耳に這入つたら、どの
やうにお歎きになるであらうか、宮があやうに、正氣の御沙汰とは
思へない迄に夢中におなり遊ばして、私に打ち込んで下さるのは、忝
く存じ上げるけれども、それは何としても間違つた、輕々しいことな

のだ、此の殿に愛憎を盡かされて、捨てられるやうなことがあつたら、どんなに心細さが身に沁みるであらうなど、いろ／＼に考へあぐねるのであつたが、男君は又、さう云ふ女君の素振を御覧になると、久しう逢はずにゐた間にたいそう分別がついて来て、大人らしいなつたことよ、淋しい暮しをしてゐるので、さまざまのことを思ひつゞけるせゐであらうと、いとほしうお感じになるまゝに、いつもよりは優しう勞つてお上げになりながら、お物語を遊ばされる。

「かねてから普請してゐた家がやう／＼出来上りかけて来ました。此の間見に行きましたら、此處よりは親しみのある遣り水なども流れてゐて、前栽の花の眺めも悪くはありません。彼處なら三條の御所も近いので、朝夕につけて、自然逢へないと云ふやうなことはなくなりませう。此の春頃に、お宜しかつたらお移し申さうと思ふのです」と仰

せになるのであるが、かのお方からも「静かな所を見つけました」など、昨日も仰つしやつてお寄越しになつたことを思ひ出すと、此方であらう云ふお話があるとも御存知がなく、そんなおつもりでいらつしやるのがお氣の毒でならず、どうしても其方の思召には従ふ譯に行かないのだと考へるせゐか、いつぞやのおん面影が幻のやうに浮んで来るので、自分ながら見下げ果てた、淺ましい女であることよと、思ひつゞけつゝ泣いてしまふと、「そんな風にくよ／＼なならないで、もつとのんびりとしていらした一頃の方が、どんなに朗かで楽しかつたでせう。誰かゝ何かお耳へ入れたのではありますまいか。私の思ひ方がもし幾分でも疎かであつたら、此のやうな身分で、此の険しい山路を、こゝまで通つて來られる譯はありませんねの」など、仰せになつて、月初め頃の夕月夜のことなので、少し端近うお出になつてお横に

ならせられながら、外のけしきをお眺めになつていらつしやる。男君は亡きおん方のことなどをもお慰びなされて哀れを催され、女君は新たに殖えた我が身の苦勞を歎きなどして、互に憂に沈んでをられる折柄であつたが、山の方には霞がかゝつて、寒さうな洲崎すまきに立つてゐる鷺の姿なども、所柄のせるかたいそう風情に富んでゐるのに、その向うには遙かに宇治橋が見渡されて、柴積しばつみ舟ふねが彼方此方を行き交ふ有様の面白さ。ほんに、餘所では見られない風景ばかりが、いろ／＼集つてゐる土地であるから、御覽遊ばされる度毎に、昔のことがおん眼の前に戻つて來たやうな心地がなさつて、かう云ふ時には相手が此のやうな人でなくても、随分なつかしさを覺えもし、ねんごろな仲にもなりさうにお思へになるのに、ましてこれは戀しいおん方に生き寫してあると云つてもさう不釣合でないばかりか、だん／＼に情愛と云ふも

のも分つて來、立居振舞も都風に物馴れて來て、以前から見るとすつかり立ち優つてゐるやうにお感じになるのであるが、女君はまた胸の中にさま／＼な悲しみが込み上げて、ともすれば湧き出る涙を落しさうにするので、どう慰めてよいのやら持て扱ひ給ひながら

「宇治橋の長き契は朽ちせじを

あやぶむかたに心さわぐな

今にお分りになるでせう」と仰せになると、

たえまのみ世には危き宇治橋を

朽ちせぬものとなほ頼めとや

さき／＼よりもひとしほ見捨て難く、ちよつとでも餘計よそぎ傍そばにいらつしやりたいやうにお思ひになりながら、世上の取り沙汰もうるさいことだし、今迄辛抱をつゞけて來てこゝで輕々しい真似をするのも残念で

あるし、それよりは早く京へ引き取つて、ゆつくりと逢ふ瀬を楽しんだ方がと思ひ返し給うて、明け方にお歸りになるのであつたが、てもまあ大人になつたものかなと、後髪を引かれるやうにお感じになるのが、つひぞ今迄にないくらゐなのであつた。

二月の十日頃に、内裏で詩を作らせ給ふことなどがあつて、此の宮も大將も御參會になつたが、折にふさはしい管絃のおん催しがあつたので、宮がたいそうお綺麗なお聲で、「梅が枝」などをお謡ひになる。ほんに、何事につけても普通の人よりは遙かに立ち優つていらつしやるのに、ときどき氣紛れなお戯れにお凝りになるのだけが、罪がお深いのであるが、その日は急に雪が降つて来て、風なども激しく吹き出したところから、御遊も早く終つたので、皆々此の宮のおん宿直所にお集りなされて、物など召し上りながら御休息なすつていらつしやると、

く、梅枝九九頁頭
註参照

イ、春の夜の闇は
あやなし梅の花
色こそ見えぬ香
やはかくるゝ
〔古今集〕
ロ、ハ、さむしろに
衣かたしき今宵
もやわれを待つ
らん宇治の橋姫
〔古今集〕

大將の君が誰かに會はうと遊ばして、少し端近う出ていらしつて、追ひ追ひ積り始めた雪がぼんやり星あかりに見えるのを御覧になりながら、「闇はあやなし」とでも云ひたいやうなおん衣の匂をおさせなされて、「衣かたしき今宵もや」とお謡ひになる。と、ほんのちよつとしたことを口説みに仰せられても、妙にしをらしいところのあるお人柄でいらつしやつて、たいそう意味ありげにひくくので、宮も寝たふりを遊ばしながら、こともあらうにと聞し召されて、胸騒ぎをお覺えになるのであつたが、いかさま、此の人も一方ならぬ思ひを寄せてゐるのだな、自分ばかりが「かたしく袖」に心を馳せてゐるやうな氣がしてゐたのに、同じ氣持を抱いてゐたとは、哀れにも辛くもあることよ、これほどの人が前からあるのをさし措いて、どうして自分の方に靡いてなどくれようぞと、妬ましくお感じ遊ばされる。

イ、前夜に題を賜
つて、翌朝詩を
獻じるのである

ロ、句宮は若菜の
巻に生れ給ひ、
薫はその翌年柏
木の巻に生れて
ゐるので、薫の
方が一つ年下で
なければならな
い。作者の思ひ
違ひにや如何

明くる日の朝は雪がおびたくしう積つてゐるのに、詩をお獻じになら
うとして、お前に伺候遊ばされる。近頃は殊にお立派にならせ給うて、
今がちやうど男盛りのお姿をしておいでになるのに、かの大將の君も、
同じくらゐなお歳頃で、二つ三つ上でいらつしやるせむか、此の方は
少し年長者らしい落ち着きやお嗜みがおありになるのが、いかにもわ
ざと作つたやうにお人柄にはまつてゐて、上品な男のお手本にしても
よいやうにお見えになつたが、さすがに御門のおん聲君でいらつしや
るだけに、何一つ備はらぬところはおありにならないやうに、世の人
人も評判申し上げてゐるし、實際にまた、學問にかけても、政治向き
のことにかけても、なか／＼後れを取るやうなお方ではいらつしやら
ない。さて詩の披講が終つて、おん方々が御退出に及ばれながら、宮
のお作を口々にお褒めになつたりお誦じになつたりしてをられるのを、

おん自らは嬉しいともお思ひにならず、人はどのやうな餘裕があつて
あゝ云ふものを作ることかと、心も空にかのあたりへ憧れていらつし
やるのであつたが、昨夜の大將のおんけはひを御覽なされてからは、
一層氣に懸つていらつしやるので、やがて苦しい口實をお拵へなされ
てお出ましになる。京にはほんの僅かしか残つてゐない雪であるのが、
山深くお這入りになるにつれて、やゝ堆く積つてゐるので、常にもま
して歩きにくい、人通りの稀な細道を踏み分け給ふのに、お供の人々
も、泣きたい程恐ろしう、難儀にさへも思ふのであつたが、例の案内
役の内記は、式部少輔をも兼ねてゐて、孰方から云つても相當重い職
分の男でありながら、いかにも役目相應に指貫の裾を引き上げなどし
てゐる姿の面白さ、かのあたりではお見えになると云ふおん消息はあ
つたものゝ、まさか此の雪ではと油断をしてゐると、夜が更けた頃右

近の許へそれと内記から申し入れるので、女君も竝々ならず勿體なく存じ上げる。右近はかう云ふやうなことから、結局はどうおなりになるかと、一方では心苦しく思ふものゝ、今宵ばかりは用心深さを忘れてしまつたのであらう、何としてもお歸し申し上げる術はないので、自分と同じやうにお氣に入つてゐる若い女房の、性質などもしつかりしたところがあるのを仲間に入れて、「えらい不都合なことなのですが、私と同じ心になつて、内證にして下さいよ」と云つたりしながら、二人してお入れ申し上げる。と、途中でお濡れになつたおん衣の薰りが、著しう匂ふのに當惑しながらも、大將の君のお越しのやうに取り繕うて、人目を紛らすのであつた。

その夜のうちにお歸りになるのなら、なまなかお逢ひにならなかつた方がましなくらゐであるが、さうかと云つて、此處の人目も憚られ給ふので、時方に工夫をおさせになつて、川の向う岸の、とある人家にお連れ出しになるやうに手筈を整へさせ給うて、豫め其方へお遣しになつて置いたのが、夜が更けてから戻つて參つて、「たいそう巧く御用意が出来ました」と申し上げる。寢てゐたところを起された右近は、これはまあ何と遊ばすのかとそはくしながら、寢惚け心地も手傳つて、頑是ない子供が雪遊びをした時のやうにぶるく／＼顛へてゐるのであつたが、「どうしてそのやうな」など、云ふ暇も女君にお與へにならず、抱きかゝへ給うてお立ち出でになる。右近は此處の留守に残ることにして、侍従を附けて上げるのであつたが、女君は明暮陸からお眺めなされて危つかしいものゝやうに見ていらしつた小さな舟にお乗りになつて、川をお渡りになる間も、遠い岸に向つて漕ぎ離れて行くやうに心細く、ひしと抱きついてをられるのを、宮はたいそう愛らしう

1. 前頁に「自分と同じやうにお氣に入つてゐる若い女房」とある人のこと

お思ひになる。有明の月が冴え／＼と空にかゝつてゐて、水の面も曇りなく見えるのに、「これが橋の小島でございます」と申して、暫く舟人が棹を突きさして舟をとめてあたりを御覧になると、大きな岩のやうな形にこんもりと枝葉の生ひ繁つた、洒落れた恰好をした常盤木があつたが、「あれを御覧なさい。何でもないやうな木ですけれど、あの千年も變らない緑の色の深いことを」と仰せなされて、

年ふともかはらんものか橋の
こじまのさきに契るこゝろは

女君も、何だか珍しい旅に出たやうな心地がして、

たちばなの小島はいろも變らじを

この浮舟ぞゆくへ知られぬ

折柄と云ひ、此の人の應對のしぶりと云ひ、すべてを面白くお感じに

なるのであつたが、やがて向うの岸に着いて、お下りになるのにも、人手に任すのを可哀さうのやうにお思ひなされて、御自分でお抱き遊ばして、而も人々に扶けられながら家の内へ這入つていらつしやるので、まあ何と云ふ不體裁な、いつたいどれ程の人をかうも大騒ぎなするのであらうと、宿守などは訝しうお拜み申し上げる。

そこは時方の叔父に當る因幡守である者が、自分の莊園の中に造つたさゝやかな家で、まだ本當には出来上つてゐないひどく粗末な建物であるのに、網代屏風など云ふ、御覧になつたこともない調度類が立て廻してあつて、風も十分には防ぎきれず、垣根の下には雪がまだらに消え残りながら、今も曇つた空から降つてゐるのであつたが、そのうちに日がさして来ると、軒の氷柱が照り映えて、そこらが明るくなり出したせるか、此の人の顔かたちもひとしほ美しうなつたやうにお

感じになる。宮も道中をお忍びなされて、身軽なおん衣をお召しになつていらつしやるし、女君も、上に着てゐたものを脱ぎすべらかしたので、ほつそりとした體つきが、至つて愛らしう見えるのであるが、こんなしどけないなりをして、何の取り繕ふこともなしに、世にも恥かしい眩いやうなおん方に面と向つてゐることかと思ひながら、何處へ逃げ隠れしやうもない。着馴らした衣の、白い無地のものばかりを五襲ほど、袖口や裾のあたりにまで色さまざまにけばくしう重ねるよりも、却つてすつきりと着こなしてゐるのであるが、朝夕逢うていらつしやるお人にしても、かうまで打ち解けておいでのところなどは御覽じ馴れないことであるから、こんな様子までが尙更珍しうも、趣深くもお思へになる。

侍従と云ふ女房も、なか／＼見苦しからぬ若い人なのであるが、此の者にまでかう云ふ姿を残りなく見られてしまふことかと、女君はひどく情ない氣がしてゐるのに、宮は、「其方は一體誰だね。私の名を人にしやべつてはいけないよ」などと、親しくお聲をおかけになつて口どめを遊ばすので、たいそう結構なお方のやうに存じ上げてゐる。さうかと思ふと、この家の宿守をしてゐる男は、時方を主人と心得て大切に取り扱ふので、宮がおいでになる次の間に、遣り戸を隔て、控へてゐる時方は、得意さうに構へながら、此の男がえらく畏つて縮み上つたやうな聲で話しかけるのに、返答もしないで可笑しがつてゐるのであつたが、「重い物忌をせよと云ふ恐ろしい占ひが出たので、都のうちをさへ遠慮して慎んでゐるのだ。餘人を近づけてはならぬぞよ」などと云つたりしてゐる。かくてお二人は何の氣がねもいらぬあたりで、お心のどかに語らひ暮し給ふにつけても、宮は大將の君がお越しにな

つてゐたとしたら矢張此のやうにしたのであらうとお思ひなされて、えらくお恨みになりながら、日頃かの君が二宮を御本妻にお据ゑになつて、崇め冊かしらいておいでになる御様子などを、話してお上げになるのであつたが、あの「衣かたしき」の句をお誦すじになつたことなどは、仰つしやらうともなさらない憎らしさ。と、時方がお手水てづやお菓子などを取り次いで運んで来るのを御覽なされて、「大事にされてゐるお客様が、そんなところを見られない方がよいであらうが」と氣をおつけになるので、侍従は若く浮き／＼とした心から、ひどく興あることに思つて、此の大夫を相手に物語をしつゝ時を過す。雪が降り積つた向う岸の、我が家の方を眺めると、とぎれ／＼に霞が棚引いてゐる間から、梢ばかりが仄かに見えて、山は鏡を懸けたやうに夕日にきら／＼と輝いてゐるのに、男君は昨夜踏み分けておいでになつた道中の辛さ

イ、時方のこと

などを、さも哀れつぼく仰せ聞かされたりして、

「降の雪みぎはの氷ふみわけて

君にぞまどふ道はまどはず

「木幡こはたの里に馬はあれど」など、薄汚い硯をお召し寄せになつて、いたづら書きなさるのであつたが、

ふりみだれ汀に凍る雪よりも

中空にてぞわれは消ぬべき

と、傍からそんなことを書くので、その「中空にて」と云ふ句をお咎めになると、ほんによくないことを書いたものよと、恥かしう思つて引き裂いてしまふ。全く、さうでなくてさへめでたいお姿をしていらつしやる宮のやうなお方が、いよ／＼深く人の心に食ひ入るやうにと、一生懸命にお勤めになることであるから、そのお言葉やお取りなしの

イ、山科の木幡の里に馬はあれど
かちよりぞ来る君を思へば（拾遺集）

お優しさは、何とも申し上げやうもないのであつた。

おん物忌は二日の間と云ふことに拵へてお置きになつたので、わりにゆつくりしたお氣持でお逢ひになれるところから、互に哀れと思ふお心が深まり給ふばかりなのであるが、さう云ふうちにも、右近が例の巧い工合に云ひ繕つて、おん衣などを持たせて寄越したので、今日は亂れた髪などを少しは梳かせたりして、濃い紫の衣に紅梅の織物などを、色の取り合せも面白う着かへてをられる。侍従も薄よごれのした褶を着けてゐたのを、新しいのに着かへたので、宮はその裳をお取りなされて、假初に女君にお着せになつて、お手水の水をかけてお貰ひになる。それにつけても、女一宮に此の人を附けて上げたら、どんなにお氣に召すか知れない、貴い家柄の女達も随分多く奉公に上つてゐるけれども、此れだけの器量を持つたのはゐないであらうなど、お思

い、上裳のこと

口、裳は本来宮仕をする女房だけが着けるものであるから、今女君が假に裳をつけた姿を見て思

ふのである

ひになりながら、見つともない程お戯れになつて遊び暮し給ふのであつたが、こつそりと京へ連れて行つて匿ひたいと云ふことを幾度となく仰せになり、それ迄の間に大將の君にお逢ひにならないやうになどと、いろ／＼むづかしい約束をおさせになるのを、たいそう辛いことに思つて、答へもせず涙をさへ流す様子なので、かうして自分を眼の前に見てもかの人のことを忘れずにゐるのかと、お胸が痛いやうにお感じになる。かくて、恨んだり泣いたりなさりつゝ、さまざまに語り明かし給うて、まだ夜が深いうちに、再び舟にお乗せなされて向う岸へお歸りになるのに、矢張おん自ら抱いてお上げになりながら、「あなたがあのやうに思つておいでになるお人は、とてもかうまで親切ではありませんまい。此の心持がお分りになつたでせうか」と仰せになると、女君もほんにさうよと思つたらしく頷いてゐるのが、ひどくいぢらし

う見えるのであつた。

右近が妻戸を開けてお入れ申し上げると、宮はその戸口で別れをお告げ遊ばして、お立ち出でになりながらも、たいそうおん名残をお惜しみになる。そして、かう云ふ折のお歸りには、矢張二條院の方へお戻りになるのであつたが、それから後はえらく御氣分がお悪いらしうて、さつぱり召上り物などもお取りにならず、日が立つにつれて青白く瘦せておいでになり、お顔つきが變つていらつしやるのを、内裏を始め參らせて、執方でも御心痛遊ばして、頻りにお見舞などをお寄越しになるので、尙更そんなお取り込みの中では、おん文さへ細々とはお書きになれない。たまにお遣しになつたにしても、山里の方でもあの過ぎ者の乳母が、自分の娘がお産をするのでその方へ行つてゐたのが、此の頃は又歸つて來てゐるので、なか／＼落ち着いて讀むことも出來

ない。母北の方は、あゝ云ふ田舎で不自由な暮しをさせておくのも、今に大將殿が迎へにいらしつて下さるであらうと、たゞそればかりを當てにして、慰められてゐたのであるが、さうかうするうちに、表向きではないながらも、近々都へ引き取ると云ふお氣持におなりなされたので、やれ／＼、それでこそ世間體もよくなるし、ほんに喜ばしいことだと思つて、ぼつ／＼女房を召し抱へたり、顔の綺麗な女童などを雇つたりして送つて來る。女君にしても、勿論さう云ふ風になるのが順當ではあり、自分も初めからそのつもりで待つてゐたことは承知しながら、でも御熱心な宮のおんことを思ひ出すと、恨めしさうにしていらしつた御様子や、搔き口説き給うたお言葉のふし／＼などが、今もまざ／＼と浮んで來て、暫く／＼とする隙にも、おん面影を夢に見たりするのが、自分で自分に愛憎が盡きる程なのである。と、



イ、たちねの親
のかふこの蘭ご
もりいぶせくも
あるか妹に逢は
ずて〔拾遺集〕

雨が降り止まないで、いやなお天氣が幾日も打ちつゞく頃、宮はひとしほ、山路を踏み分け給ふことなどはお出来にならず、遣る瀬ない心地が遊ばすまゝに、「親のかふこ」は何と窮屈なものであらうと、勿體ないくらゐにお焦れなされて、お胸に餘ること々々を書き連ね給うてお寄越しになる。

ながめやるそなたの雲も見えぬまで

空さへくるゝころの佗びしさ

お筆にまかせて走り書きをしておありになるのが、却つてお見事に、面白く拜めるのに、とかく心が浮き立ち易いら若い身には、思召の程がいよゝうれしう、だんゝその方へ靡いて行きさうになるのだけれども、もとから契つてゐた大將の君とても、さすがに矢張奥深いところがおありなされて、御人品がすぐれておいでになるやうな氣が

するのは、此のお人に依つて始めて愛情と云ふものを知つたからであらうか、それにつけても、かう云ふ淺ましいことをお聞き込みになつて、私をお疎みになるやうなことが出来たら、何として生きてゐられよう、かの君に迎へられる日を待ち佗びてゐる母上なども、さぞや意外にも情なくも思つて、當惑なさるであらう、それに又、此のやうに打ち込んで下さる宮にしてからが、えらく浮氣っぽい御本性でいらつしやると聞いてゐるので、ほんの今のうちだけのことではないのか、假に此のまゝ京へお匿ひなされて、未長く人數の中へお入れになつて下さるとしても、あの對のおん方がどうお思ひになるであらうか、何事に依らず、内證事は直き知れてしまふ世の中であるから、いつぞやにしてもあの怪しからぬ振舞をなすつた夕ぐれに、ちよつとお目に懸つたことが手蔓になつて、斯様に私の隠れ家をお見つけになつたでは

ないか、まして私が京に圍はれてゐたりしたら、それがどうして大將殿のお耳に這入らずにゐるものかなど、考へて行くと、自分の方にも越度こもどがある譯であるし、矢張かの殿に見捨てられると云ふことは、溜ならなく辛いであらうと思へたりして、いろ／＼に案じ煩ふのであつたが、さう云ふ折しも、殿からもおん文のお使がある。が、それとこれとを並べて見るのも厭いとなので、長々と事細かにしたゝめておありになる宮のおん文の方を読みながら、横になつておいでになると、侍従と右近とが眼を見合せて、「矢張お心がお移りになつたのですね」と、云ふともなしに云ひながら、「でもまあ、それもお道理ですね。殿のお姿も、類ないやうに存じ上げてゐましたけれども、宮のおん有様は又格別でいらつしやいますもの。あの御冗談などを仰つしやる時の、愛嬌のおありになること、云つたら、私でしたら、これほどのお志を見な

がら、かうしてなどゐられるのですか。后宮きさきみやの御殿にでも御奉公に上つて、朝夕お逢ひ申さずにはをりますまい」など、侍従が云ふと、右近がまた、「まああなたは油斷のならない。でも大將殿のお人柄に優つたお方が何處においでせう。お顔だちなどは兎に角として、お心ばへと云ひ、おん物越ものこと云ひ、何とお立派ではありませんか。それに付けても、宮とかう云ふ風におなりなされましたのは、全く見苦しいことですね。どうなさるおつもりなのでせう」と云つたりして、頻りに噂をし合つてゐるのは、一人で氣を使つてゐた時よりは、謔たぶをつくにも相棒が出来たと云ふのもあらうか。

後から来た方のおん文には、「氣にかけながら御無沙汰をしてしまひました。ですがとき／＼は其方そのかたからも音づれて下さいましたら、どんなに嬉しいか知れませぬ。かやうなことを申しますのも、竝大抵な思ひ

方ではないからです」などおしなめになつて、端の方に、

「水まさるをちの里人いかならん

晴れぬながめにかき暮すころ

常よりも、お慕ひ申す心が殊につのりまして」と、白色紙に遊ばして、立文にしておありになるのが、御筆蹟もさう一々お上手と云ふのではないけれども、何となく書き方に仔細らしいところがお見えになる。それに引きかへて宮のおん文は、たいそうお言葉数の多いものなる。小さく結んでおありになるのが、とり／＼に面白いのであるが、「誰も見てをりませぬうちに、先づ此の方からおん返りごとを」と右近や侍従がすゝめると、「今日はよう書きませぬ」と恥かしさうに云ひながら、たゞ手習のやうにして、
里の名をわが身に知れば山城の

うぢのわたりぞいと住みうき

と、いたづら書きをしたりしてゐる。が、いつぞや宮がお書きになつた繪を、折々出して見てゐると、ひとりでに涙が流れて来る。どうせ長くは續けられないことなのだと思つて、いろ／＼な風に諦めようとしてみるけれども、此のまゝ餘所へ行つてしまつて、ふつつりお逢ひ出来なくなるのは、とても悲しく感ぜられるまゝに、

「かきくらし晴れせぬ峰の雨雲に

浮きて世をふる身をもなさばや

「まじりなば」としたゝめて上げるのを、宮は御覽遊ばすなりよゝとお泣きになりながら、さう云つても戀しがつてゐるのであらうとお察しなされて、じつとうなだれて考へ込んでゐるいとしい人の姿ばかりを、おん面影に浮べていらつしやるのであつた。

イ、白雲の晴れぬ
雲井にまじりな
ばいづれかそれ
と君は尋ねん
〔花鳥餘情所引〕

一方、あの辛氣臭いお人は、御自分のところへ来た返事をゆる／＼と御覧になりながら、あゝ今頃はどんなに淋しがつてゐるであらうと思ひやり給うて、えらく戀しうおなりなされて、

つれ／＼と身を知る雨のをやまねば

袖さへいとゞみかさまさりて

と書いてあるのを、下へもおかず見守つておいでになるのであつたが、女宮におん物語などを聞え給ふおついでに、「失禮なとお思ひになりはしないかと、氣が引けるのでございますが、實は久しう馴染を重ねてゐた人がありますのを、あやしい田舎に捨てゝ置きましたところ、たゞいそうふさぎ込んでをりますのが心苦しうございますから、近いあたりへ呼び寄せたいと存じます。いつたい私は、昔から一風變つた考を持つてをりました、普通の人のやうではなく、獨身で過すつもりでゐ

イ、數々に思ひ思はずとひがたみ身を知る雨はふりぞまされる
〔古今集〕

たのでございますが、斯様にお逢ひ申し上げるやうになつたにつきまして、さう一途にも世を捨てにくうなりましたので、今迄は人に知られないやうにしてをりました女のことまでが、何だか可哀さうのやうな、罪な氣がして參りました」など、仰せになると、「何の遠慮であるのやら、私には分りませぬのに」とおん答へ遊ばすので、「でも、内裏あたりへ悪しざまに聞え上げる人がありは致しますまいか。世上の取り沙汰と云ふものは、とかく不都合な、怪しからぬものでございますが、その實そんなに騒がれるやうな大した女ではございませぬ」などとお聞えになる。そして、かねてお建てになつた所へ迎へ取らうと思ひになるにつけても、さてはさう云ふお積りの御普請であつたかなど、大仰に云ひふらされるのがお心苦しう、ごく内々でおん襖などを貼らせ給ふのであつたが、人もあらうに、それをあの内記が妻の親

の、大藏大夫である者に、お心やすいまゝにお云ひつけになつたので、その者の口から傳へくゞて、宮のお耳へ筒抜けに聞えてしまふのであつた。

イ、徳の繪を畫く
繪師達のことであるが、隨身共の中にさう云ふ心得のある者がゐるのであらう

「繪師達などは、御隨身共の中から氣心の分つた殿人などをお選びになりまして、さすがに凝つたものを作らせていらつしやいます」など、御お聞きになると、宮もいよゝゝじつとしてはいらつしやれないで、御自分のおん乳母の、遠國の受領の妻になつて任地へ下る者の家が、下京の方にあるのを幸に、「非常に内證にしてある人を暫く匿ひたいのだが」と仰せられるので、どう云ふお人なのであらうと心もとなく思ひながらも、容易ならぬ事件のやうなお言葉であるのに、お断り申すのも恐れ多くて、「では御用立て致しませう」と聞え上げる。それでやうやう隠れ家がお出来になつたので、少し安心遊ばしながら、此の月

末頃に受領の夫婦が立つて行つたら、その日のうちに直ぐその跡へ連れておいでになるお心組で、山里の方へも、斯様々々にするつもりだから、ゆめくゝ人に氣取られぬやうにと仰つしやつておやりになるのであつたが、御自身でお出かけになることなどは、なかゝお出来になれないでいらつしやるのに、彼方からも、例の乳母がやかましいので、何かと思ふに任せない由を申して来る。そんな間に、大將殿の方は四月の十日と云ふことにきめておしまひになつたので、女君は今更「誘ふ水あらば」と思ふ譯にも行かず、それにしてもまあどうしたらよい我が身なのであらうと、さつぱり心が落ち着かないまゝに、暫く母上の許に歸つて、ゆつくり考へてみようかなども思ふのであつたが、京の館では少將の北の方のお産が近くなつたと云ふので、修法だの讀經だのと絶え間なく騒いでゐる折柄で、歸つて行つても石山へ詣でる

イ、佗びぬれば身を浮草の根をたえて誘ふ水あらばいなんとぞ思ふ〔古今集〕

ことなどは出来さうにもない。と、母親の方から或る日此方へ訪ねて来てくれたので、乳母が挨拶に出て、「女房達の装束のことなども、殿からこま／＼とお心づけがございましたので、どうか何事も立派なやうにいたしたいと存じてをりますが、婆の一料簡で仕出來すこととございますから、どんなにかお目まだるうございませう」など、云ひながら、嬉しさうにそは／＼してゐるのであつたが、女君はそんな様子を見るにつけても、萬一飛んでもない事件が持ち上つて、外聞の悪いことになつたら、皆がどのやうに騒ぐであらう、それに生憎と宮も頻りにおせつきになつて、「たとひ「八重たつ山」の奥にお籠りにならうとも、きつと尋ね出してみせますよ。さうなつたら私もあなたも、世間に顔向けが出来ないやうになるでせうから、矢張今のうちに逃げていらつしやつた方が、無事だと思ひになつて下さい」と、今日も仰

イ、白雲の八重たつ山に籠るとも思ひ立ちなば尋ねざらめや〔河海抄所引〕

つしやつてお寄越しになつたのに、全く何としたらよいのかと思ふと、胸苦しいやうな氣がして来て、横になつておいでになる。傍から母北の方が、「いつになく顔色もお悪いし、瘦せておいでなのやうですが、どうなすつたのでせう」と驚いて云ふと、「此の頃は始終かう云ふ風で、ちよつとした物も召し上らず、しんどさうにしていraftしやいます」と乳母が云ふのに、「不思議なこともあるものですね。物怪などかも知れませぬし、それともひよつと、何ぞおありになつたのかとも存じませんが、でも此の間石山詣でをお止めになつたのですからね」など、云つてゐるのであるが、聞かされる身は恥かしくて伏し目になつていらつしやる。

日が暮れると、朗かな月が上つたので、又いつぞやの有明の空を偲んだりして、とめどもなく涙を流しながら、何と云ふ怪しからぬ心であ

イ、月の病で石山詣でを止めたのだから妊娠ではないであらうとの意

ロ、前段六六頁参照

イ、辨の尼君

らうと、自分で呆れておいでになる。母北の方は昔物語などをするついでに、彼方の尼君を呼んで来て、お亡くなりになつた姫君の御生前のおんこと、御思慮がお深くいらつしやつて、いろ／＼な事に分別がおありになつたのに、見す／＼死んで行かれたことなどを話し合ふのであつたが、「御存生でいらつしやいましたら、宮のおん方と同じやうにお附合をなさいましたでせうし、何かとお心細いあなた方も、どんなにかお仕合せでいらつしやつたでせうに」など、云はれると、自分の姫君だとしておん方々の妹君に紛れもないではないか、これで殿の御寵愛が未長う續きさへしたら、何の姉君たちに負けるものかなど、思ひながら、「此の姫君のことにつきましても、長い間随分と心配して参りましたところ、まあよい鹽梅に、大將殿がお引き取りになつて下さいますとやらで、ほつとしてゐるのでございますが、さうなりました

ら、此の山里へも、わざ／＼はお伺ひすることも出来なくなるでございませう。かう云ふ風にをり／＼お目に懸らして戴いて、心のどかに昔のこと々もを聞え上げもし、承りも致したいのでございますが」など、云つたりしてゐる。尼は、「出家姿をしてをりまして、縁起でもないと云ふ風にはかり思ひ込んでをりましたので、しげ／＼お目通りを致しますのも如何であらうと、御遠慮申し上げてをりましたが、でも私をお残しになつて、移つておしまひになりましたら、後がどんなに心細うございませう。したが、斯様な田舎のお住居はあまりおいとほしいやうに存じ上げてをりましたのに、ほんに結構なこととございませう。何しろ珍しく重々しいところがおありなざる殿の御性分と致しまして、斯様に姫君を尋ねていらつしやつたと云ふのは、竝大抵のお志ではございませぬので、いつぞやもそのことは申し上げてあつたと存

じますが、何と本當でございましたでせうが」など、云ふので、「後々のことは存じませぬけれども、先づ只今のところでは、此のやうにお情深いお言葉を戴くにつけても、偏にお取り持ちをして下さいました御親切が、思ひ出されるのでございます。それに宮のおん方までが、忝くも不憫をおかけなされまして、一時はお手許へお預かりになつて下さいました、ちと不都合な出来事などがございましたので、ゐるにもゐられず、身の置きどころもないやうになられましたのが、お可哀さうに存ぜられました」と云ふと、尼は笑ひながら、「ほんにあの宮は、人騒がせな、色つばいお方でいらつしやいますので、氣の利いた若い女房は御奉公がしにくうございます。まあさう云つても、大體は結構なお人柄でいらつしやいますから、お仕へする者も仕合せでございますが、何かそのやうなことで、おん方の御機嫌を損じでも

したら困つてしまふと、大輔の君の娘が申してをりました」と云ふ。さればこそ、女房達でさへそれほど氣がねしてゐるではないか、まして私としたことがと、女君は思ひながら、なほもお横になつたまゝ聞いておいでになると、「まあ、恐ろしうございますこと。大將殿とても御門のおん娘を賜はつたお人でいらつしやいます、でもまあ外で、餘所の者となら兎角のことがおありになつたとしても、致し方がございませぬかと、憚りながら存ぜられるのでございます。それにつけても、萬一姫が間違つたことでも仕出來しでされましたら、身に取らましてどんなに辛うございませうとも、二度とお會ひしようとは存じませぬ」など、話し合つてゐる様子に、ひとしほ膽が潰れるやうにお感じになる。

もうかうなつては、矢張此の身を亡くした方がよいのではないか、さ

もなかつたら、しまひには外聞の悪いことが起らずにはゐないであらうなど、考へつゞけておいでになると、川瀬の水が凄じいひゞきを立て、流れて行くので、「もつと静かな川もあるでございませうに、こんなに水音の荒々しい、世にも恐ろしいやうな所に、長い間住んでおいでなのでございますものを、少しはいとほしう思し召すのが當り前でございます」などと、母北の方が得意さうな顔つきをして云つてゐる。その尾について、昔から此の川の流が早くてたび／＼間違があることなどを、人々が語り出して、「つい先達も渡守の孫の童が、棹をさし外して落ち込みましたが、總じて此の川では、命を失ふ人が多うございます」と云ひ合つてゐるので、それにしても、自分が身を投げてしまつたら、誰方も／＼びつくり遊ばして力をお落しになるであらうが、それはその當座だけのことではないか、もし生きながらへてゐて、世

の物笑ひになるやうな淺ましいことに出遇ふとしたら、とても苦勞の絶える時がないのだと思つてみると、結局自分が死にさへすれば、誰にも迷惑をかけないで済み、四方八方が圓く治まるやうな氣がするのだけれども、又思ひ直すと、溜らなく悲しくなつて來るので、母君が頻りに心配して云つてゐることを、寝たふりをして聞きながらつくづくと思案に暮れてしまふ。と、母北の方は、病人らしう瘦せておいでになるのを見て、乳母にも注意を與へたりして、「御祈禱などもし上げて下さい。祭や祓なども斯様々々になさるやうに」などと、實のところは「みたらし河に御禊」をしたいくらゐであるのに、さうとも知らずにやかましく世話を焼きながら、「人手が少いやうですが、女房衆はなるべく筋の通つた所からお求めになるやうにして、新參の者を京へお連れになることは、お止めになつて下さいよ、やんごとないあた

1、懸せじとみたらし河にせし御禊神は受けずもなりにけらしも
〔古今集〕

い、みちのくち武

りのお附合つきあひと云ふものは、御本人は何事についても鷹揚たかやうでいらつしや
 いますけれども、自然競争遊ばすやうなおん間柄まがらひになれますと、お
 互にお側の人達がうるさいこともあるでせう。萬事内密ばんじないみつにして、さう
 云ふことを氣をつけて下さい」などと、何一つ落ちのないやうに云ひ
 置いて、「彼方にもお産をする人がありますので、その方も氣にかゝり
 ますから」と云ひながら歸りかけるので、それでなくても心配事が胸
 に一杯で、何かと心細い矢先ではあるし、もう會ふ時はないやうな心
 地ちもするまゝに、「氣分が悪うございますのに、行つておしまひになり
 ましては、ひどく頼りなうございます。では私も御一緒に、ちよつと
 でも彼方へお供をさせて下さいまし」と慕ふのであつたが、「私もさう
 思ひますけれども、京の館もえらくごたついてゐて、女房達が縫ひ物
 をする場所もないほど、手狭てぢなのです。まあそのうちに、たとひ「武

生の國府くにのくににわれ
 はありと、親に
 は申したべ、心
 あひの風や、さ
 きんだちや「催
 馬樂「道口」

生の國府くにのくににお移りになりましたも、そうつとお目に懸りには参りま
 すが、かう云ふ賤しい身分なのが、あなたのためにおいとほしうて」
 などと語りつゝ泣くのであつた。

殿からは今日もおん文をお寄越しになる。御病氣と云つて上げたにつ
 いて、「御容態はいかゞですか」とお尋ね遊ばして、「自身でお見舞ひに
 伺ひたいのですが、よんどころない用事が多いものですから、さう云
 ふ譯にも行きかねてをります。もう直ぐ京へお迎へするのだと思ひな
 がら、その日の來るのが待ち遠しう、却つて今が一番遣る瀬せないやう
 な」などとおありになるのであつたが、宮からも、昨日の御返事がな
 かつたので、「今更何を迷つていらつしやるのでせうか。「風かぜのなびかん
 方かた」も氣になりますので、心配のあまりぼんやりして、ひとり考へ
 込んでをります」などと、此の方は長々とおしたゝめになつてお寄越

い、須磨の海人の
 體やく煙風をい
 たみ思はぬ方に
 たなびきにけり
 「古今集」

イ、大内記のこと

しになる。と、此の前雨の降つた日にも、此の兩方のお使の者が此處で行き遇つたことがあつて、今日も亦その同じ男共が来たのであつたが、大將殿の御隨身は、宮のお使の男の顔を、あの式部少輔の家で折見かけて知つてゐるので、「貴殿は何で此處にたび／＼來られるのか」と問ふと、「私の用事で人を訪ねに來るのだ」と云ふ。「私の用事で會ふやうな者に、あゝ云ふ艶な文を持つて來るだらうか。何か仔細がありさうではないか。なぜさう隠すのだ」と重ねて詰ると、「ほんたうはあの守の君が、この女房におん文をお上げになるのだ」と云ふ。でもまだ何だか辻褃の合はないところがあつた。その場は別れながら、此處でそんなことを問ひたゞすのも變であるから、その場は別れてしまつたが、此の隨身はなか／＼才のある者なので、供に連れてゐた童を呼んで、「それとなくあの男の跡を尾けて、左衛門大夫の家に這入るか

ロ、時方のこと。
左衛門大夫で出雲權守を兼ねてゐる

ハ、左衛門尉で五

位「大夫」に叙せられた者、こゝでは時方

どうか見届けて來い」と云ひつけて遣つたので、やがて歸つて來て、「あの人は宮の御殿へ參つて、御返事のおん文を式部少輔に渡しました」と云ふ。何分宮のお使と云ふのは、思慮の足りない下司のことであるから、さう迄にして調べられようとは思ひも寄らず、深い事情なども知らなかつたので、口惜しくもその舍人に見顯はされてしまつたのであつた。

さて御隨身は大將殿のおん許に參つて、ちやうどお出ましにならうとする折柄に、おん返りごとを差上げる。后宫が六條院にお退りになつていらつしやる頃のことなので、殿はおん直衣をお召しなされて、共方へお伺ひになるところであつたが、前驅の人々などもさう仰々しうお付き添ひ申してゐないのを見て、おん文の取次をする人に、「不審なことがございました、それを見届せよう」と存じたものでございますか

イ、中宮のおんこと

イ、太政官の下級の役人、外記、史等の稱。但し大内記は中務省の官であるから太政官の役人とは云ひ難いが、詔勅の起草をする故に當時斯く呼んだのであらうか

ら、今までかゝつてしまひました」と言譯をしてゐると、ちらとお聞きつけになつて、歩み出ていらつしやりながら、「何事か」とお尋ね遊ばされる。が、取次の人に聞かれては工合が悪いと思ふので、黙つて畏つてゐると、何か仔細があるのだなと、殿も看てお取りになりながらお立ち出でになつた。その日は后宮が例になくお悪い御様子だと云ふことなので、親王達も皆お集りになり、上達部なども大勢参り上つてゐて、忙しさうにしてゐるのであつたが、でもそれほどの御容態でもいらつしやらない。さうかうするうちに、あの内記は政官であるから、いろ／＼の御用を片付けてから遅くお伺ひして、さつきのおん文を宮に差上げようとする、宮は臺盤所にいらつしやつて、戸口にお呼び寄せなされて、お受け取りになる。大將はお前からお退りになつて、お通りかゝりに横眼で御覽になりながら、何か大事さうなおん文

イ、夕霧左大臣

のけはひだなと、おん興を催し給うたので、お立ち止りになつたが、宮は中をお開けなされて、お讀みになつていらつしやる。見ると、紅の薄様に、こま／＼としたゝめてあるらしいのであるが、御當人はそれに氣を取られて、外を向かうとも遊ばされないのに、折あしく大臣も御退出になつて、そこをお通りかゝりになるので、大將の君は襖の蔭からお出になりながら、それとお悟りになるやうに、咳拂ひをしてお上げになる。と、宮が慌てゝお隠しになるところへ大臣がお通りかかりになり、此方をお覗きになつたので、急におん直衣の紐をお結び遊ばすと、大臣もそこに膝をおつきになりながら、「只今退出いたすところでございますが、例のおん邪氣が久しうお起りになりませなんだのに、恐ろしいことでございます。これから直ぐに山の座主を請じるやうに、人を遣さうと存じます」と、忙しさうに仰せになつて立ち出

ロ、おん直衣の襟を外して、打ち解けていらしたものである

でられる。

夜が更けたので、皆々お退りになる中に、大臣は宮のお後から、御子息の上達部たちを大勢お連れなされて、御自分の御殿の方へお渡りになる。大將の君は後れてお出ましになりながら、あの隨身が様子ありげにしてゐたことを怪しうお思ひ遊ばして、お供の者が御車の用意をしたり、松明を燈したりしてゐる隙に、その男をお召し寄せになつて、「さつきの話はどう云ふことなのだ」とお問ひになると、「さればでございます。今朝ほど宇治へお使に参りました節、出雲權守時方の朝臣に仕へてをりまする男が、紫の薄様にした、めまして櫻の枝に着けました文を、西の妻戸のあたりから女房に渡してをりますのを見つけましたのでございますが、斯様々に問ひ質しましたところ、辻褄の合はぬことを申しますのが、どうも謾らしうございましたので、何を云ふ

やらと存じまして、童に跡を尾けさせましたら、兵部卿宮の御所へ参つて、式部少輔道定の朝臣に、その文の返事を渡したと云ふのでございます」と申し上げる。君は訝しうお思ひなされて、「その返事の文は、どう云ふ風にして出したのだ」「それは私は見てゐなかつたのでございます。何でも私のをりませぬ方から出したのでございますが、下人の申しますのは、紅い色紙の、たいそう綺麗なものだつたさうでございます」と聞え上げるので、先刻臺盤所の戸口でちらと御覽になつたのを思ひ合されると、てつきりその文に紛れもない。でもまあ跡を尾けさせてまで調べ上げたとは、氣轉が利いてゐることよとお思ひになりながら、お側近くに人が大勢控へてゐるので、委しいことは仰せられるべくもないのであつたが、お歸りになる途々も、矢張あの宮は恐ろしく抜け目のないお方でいらつしやつたのだ、しかし一體どのやう

な折に、あゝ云ふ人がゐると云ふことをお聞き込みになつたのであらう、そしてどう云ふ風にして云ひ寄せられたのであらう、あんな田舎に住まはして置いたら、まさかかう云ふ間違はある筈がないと思つてゐたのは、何と云ふ迂闊なことだつたか、とは云へ、此方こちに何の係り合ひもない人を相手になさるのであつたら、どんな浮氣を遊ばすのもよいが、昔から心を打ち明けてお附き合ひ申し上げ、随分怪しからぬやうなお取持だの、道案内だのを勤めて上げた此の身に對して、後暗いことをなさるとはお思ひになると、無念さがお胸に湧いて来る。それを思へば自分などは、あの對のおん方のおんことをどんなにかお慕ひ申し上げながら、長の年月を大人しく過してゐるのは、ほんに呆れるほど悠長な男だと云はなければならぬ、而も自分の昨日や今日に始まつたと云ふやうな體裁の悪いものではなく、前から深いいきさ

つがあるのではないか、それでさへ心のうちに疚しいところが出来ては、人のためにも自分のためにも苦しまなければならぬと思ふばかりに、差控へてゐたのであるが、考へてみれば愚かな遠慮であつたのだ、だがそれにしても、近頃宮はあゝ云ふ風に御病氣でおいでなされ、自然お見舞客などの出入りが多くて、例よりも取り込んでいらつしやるのに、あんな田舎へ文をお遣しになるやうなお暇が、いつおありになつたのであらう、もう通とほひ初はめていらつしやるのであらうか、戀のためにはあの遠い路をはるゝお渡りになるのか知らん、さう云へばいつぞや、宮のお行くへが分らないで、お出先を捜してゐると云ふ噂が立つたことがあるではないか、いかさま、さう云ふおん物思ひがおありなされて、いろゝな御心勞を遊ばすところから、何となく御氣分もお悪いのであらう、昔、今の對のおん方をお訪ねなされて、宇治

へお通ひになつた時代にも、首尾が悪くてお出ましになれないやうな折には、端はなの見る目もおいたはしい程焦れていらつしやつたものを、など、云ふ風にお考へになると、先日女君がひどく沈んでゐたことなども、だん／＼事情が分りかけていらしつた今となつては、一々思ひ當り給ふので、たまらなく辛くお感じになる。

それにつけても、うまく行かぬものは人の心であることよ、あんなに愛らしう、おつとりとしてゐるやうに見えながら、矢張浮氣な性分の人であつたのだ、全く宮のお相手には持つて來いの人なのだ、いつそ彼方へ譲つて上げて御自分は手をお引きになりたいやうなお心持もなさるのであるが、でも最初から本妻にする氣はなかつたのであるから、さう云ふ女ならさう云ふ女として、今のまゝにして置かうではないか、もう此れ限りの縁と思つて逢はないやうにしたら、また戀しさ

1、匂宮の一つおん腹のおん妙宮

ロ、藤の家司の名、大内記が此の家司の舞に當ること一六頁にあり

が募るであらうと、見つともないくらゐいろ／＼とお迷ひになる。それに、こゝで自分が愛憎を盡かして捨て、しまつたら、きつとあの宮がお引き取りになるではあらうが、どうせその人の後々のためなどを計つておやりにはならないであらう、初めはいとしがつていらしつたのに、段々飽きておしまひになつて、一品宮いちひんのみやの御殿などへ奉公に差上げておありになるのが、もう今迄にも二三人はあると聞いてゐるのに、やがてあの人もそんな風になるのであつたら、それを見たり聞いたりするのはどんなに可哀さうであらうと思へになるので、矢張放つて置くこともお出来にならず、様子を知りたくおなりなされて、御文をお遣しになるのであつたが、例の御隨身を、人のゐない折にお召しなされて、「道定の朝臣は、今でも仲信の娘の許へ通ふのだらうか」と直き直きに仰せになるので、「左様でございます」と申し上げると、「宇治

イ、隨身の手前、
宮のことを隠し
てわざと道定の
懸幕のやうに云
ひ做すのである

へはいつもその男を使に遣るのだらうか。彼處のお人は、一時落ちぶれてをられたことがあるものだから、道定なども思ひを懸けるのであらう」と呻くやうに仰せなされて、「必ず誰にも見付からないやうに行つて參れ。見付かつたら飛んだことだぞ」と仰せ聞けられる。御隨身は畏りながら、さう云へばあの式部少輔が、常々殿の御動靜を尋ねたり、宇治のことを聞いたりしたのを、成る程と思ひ合すのであつたが、でもそんなことを馴れ／＼しう申し上げる譯にも行かない。君も下司などに委しい事情は知らせたくないとお思ひになつていらつしやるので、それ以上はお尋ねにならずに、出しておやりになる。

かの山里では、例になくお使がたび／＼やつて来るにつけても、さまざま物思ひが増すのであつたが、おん文にはたゞ、

「浪こゆるころとも知らず末の松

ロ、君をおきてあ

まつらんとのみ思ひけるかな

人の笑ひ物にはして下さるな」とおありになるので、妙なことを仰せになるものよと思ふと、急に心配が込み上げて来る。此のお歌の意味が分つたやうな顔をしておん返りごとを聞え上げるのも氣が咎めるし、お考へ違ひでございませうと云ふのも變なものなので、おん文はもとのやうに結んで、「これはどうやら受取人が違ふやうに存ぜられます。生憎氣分がすぐれませぬものでございますから、何事も失禮いたしまして」と書き添へて上げるのであつたが、君は御覽遊ばして、さすがに巧く云ひ逃れをしたことよ、斯様に氣轉が利かうとは思つてもゐなかつたのにと、ついほゝゑみをお洩らしになるのは、矢張どうしてもようお憎みにはならないのであらう。

さうはつきりとはないけれども、それとなく恨みをお述べになつた

だし心をわが持
たば末の松山浪
もこえなん(古
今集)

らしいのに、女君の方ではいよ／＼胸を痛めながら、これでとう／＼我が身も破滅になるのであらうと、ひとしほ途方にくれてゐる折柄、右近がお前へやつて来て、「どうして殿のおん文をお返しになつたのでございます。さう云ふことを遊ばすのは、えらい不吉でございますものぞ」と云ふので、「でも私には腑に落ちないことが書いてあるから、餘所へおやりになるおん文かと思つて」と仰せられる。實は右近は、様子を怪しく感じたので、さつきおん文を使の人に返す途中で、怪しからぬことにはそうつと開けて見たのであるが、見たとは云はずに、「まあ、お可哀さうに。困つたことでございますね。殿は大方事の次第をお悟りになつたのでございませう」など、云ふのに、さつと面を赧らめ給うて、物も仰せられない。まさか右近が偷み讀んだとは心づかれる由もないので、誰か殿のおんけはひを知つてゐる人が外にあつて、

その者から聞いたのであらうと思ひながらも、「誰がそんなことを云ひましたか」など、もようお尋ねにならないで、此の入達がどんな眼で見、どんな感じを抱くであらうかと、云ひやうもなく恥かしう、我から好んで仕出來したことはないにしてからが、いつも苦勞の絶えない宿世を打ち歎きつゝ臥ておいでになると、右近が侍従と話しながら、「私の姉が常陸の國で二人の男に係り合つてゐましたが、身分の高下に拘らず、さう云ふことは誰にでもあるものなのです。ところで二人が負けず劣らず親切を盡すものですから、姉は執方に靡かうかと迷つてゐるうちに、後の男の方に少し心が傾くやうになりましたので、前の男がそれを妬んでとう／＼後の男を殺して、自分も姉と夫婦別れをしてしまひました。そんな譯で、國府でも可惜一人の兵士を失うたばかりか、その、殺した方の男にしても、役に立つ郎等でしたのに、さ

イ、國の守の館

ロ、乳母のこと。
右近が自分の母
のことをかく云
ふ

う云ふ過ちを犯した者を召し使ふことは出来ないとおつて、國の内を
追ひ拂はれてしまつたのですが、すべては女のふしだからだと云ふ
ことになつて、姉も館やうから追ひ出されました。で、それからずつと東
國の人になつてしまひましたので、姥おばは今でも戀しがつて泣いてをり
ますが、ほんに罪の深いことですね。斯様な折に縁起でもないことを
云ふやうですが、貴いお方でも賤しい人でも、此の道にかけると分別
をなくすやうになりますのは、全くよいことではありませぬ。まさか
お命いのちに關することは無いにしましても、御身分に應じて、それ／＼報い
をお受けにならねばなりません。貴い地位のお方になれば、却つて
死ぬにもまさるやうな恥かしい思ひもなさいます。ですから矢張お一
方かたにおきめになるのですね。宮にしましても殿にも優まさつてお志がお深
く、真劍でさへいらつしやいますなら、いつそ其の方へお靡なきになつ

て、あまり餘計な物思ひはなさらないやうに遊ばしませ。かうしてく
よくよしていらしつて、瘦せ衰へておしまひになるのは、ほんに詰ま
りませぬ。おん母上があつたやうにお案じになつていらつしやいますの
で、姥も殿との御縁組のお支度に夢中になつて、氣を遣つかつてゐますけ
れども、それより此方へ来てくれるやうにと、宮が仰つしやつていら
つしやいますのが、何だかひどく心苦しう、おいとほしいやうに存ぜ
られて、など、云ふのに、侍従がまた、「まあ厭いやな。そんなに突き詰め
たやうに仰つしやるものではありません。何事もおん宿世なのです。か
ら、たゞ御自分がお考へになつて、いくらか好きとお思ひになります
方を、それとおきめなされませ。でもまあ宮が、あんなに御熱心に、
勿體ないほど打ち込んでいらつしやるのを見ますと、殿も折角お支度
をなすつておいで、すけれども、どうも其方へは差上げたくないやう

な、暫く何處かへおん身をお隠しになつてゝも、矢張お志のお深い方へいらつしやつたらと存じます」と、これはたいそう宮をめでたく存じ上げてゐる女であるから、一途にそんな風に云つてゐる。すると右近が、「さあ、私は何も、どちらにおなり遊ばしても結構ですから、無事に收まりがつかますやうにと、初瀬や石山などに願をかけたてゐるのです。それと云ふのが、大將殿の御莊園の人たちと來たら、えらい亂暴者が揃つてゐまして、その一類が此の宇治の里に満ち／＼てゐるのです。大方此の山城と大和のうちで、殿が領していらつしやる所々の番人共は、いづれも此處の内舎人と云ふ者の縁つゞきになつてゐるのですが、その内舎人の聲になる右近大夫と云ふ者が頭になつて、御領地を治めて行くやうに仰せ付かつてゐるのです。やんごとないおん方々同士は、手荒なことをさせようなど、お思ひになりはしま

せぬけれども、物の道理を心得ぬ田舎人達が代る／＼警固に上るのですから、自分の番の時にちよつとでも間違があつてはならないなど、思つて、どんな粗相をしないものでもありません。いつぞやお舟でお出ましになりました折なども、随分お危いことだと存じてをりました。が、宮は無關に人目を包まうと遊ばして、お供などもお連れにならず、いつもお姿をお窺しになつていらつしやいますから、そんなところをさう云ふ人間が見つけましたら、それこそ何を仕出來しますやう」と云ひ續けるのに、女君は、矢張自分が宮の方をお慕ひ申してゐるのだと察して、此の人達はかう云ふのであらう、ほんにきまりの悪いことだ、自分の心は孰方にしようとも考へてゐる譯ではなく、たゞ宮が恐ろしく愧れていらつしやるので、どうしてそんなに迄お思ひになつて下さるのかと、呆れて、夢のやうな心地がしてゐるのだけれども、さ

うかと云つて、久しい間お世話になつてゐたお人と、これきり切れてしまはうなど、云ふやうな氣にはなれないからこそ、こんなにひどく苦しんでゐるのではないか、全く、右近が云ふやうな間違などが出來たりしたらと、つくづくと思案に暮れてゐる。そして、「どうかして私は死んでしまひたい。私のやうに並外れて苦勞の多い者があるだらうか。下々の人達の中にだつて、かう板挟みになつて苦しい思ひをするやうな例は、めつたにありはしないでせう」と云ひながら、俯伏しに臥しておしまひになるので、「そんな風にお思ひなさいますな。お心が休まるやうにと存じたればこそ、あゝ申したのでございます。前には心配なことがおありになつても、一向何でもないやうに、吞氣さうにしていらつしやいましたのに、此のおんことが出來ましてからは、たいそう苛々なさいますので、ほんに不思議に存じてゐるのでございま

す」と、事情が分つてゐる者は皆さう云つて胸を痛めるのであつたが、乳母はひとり嬉しさうに、物を染めるやら縫ふやらする仕事に忙しく、新參の女童などの、顔の綺麗なのを呼び出したりして、「まあ此の兒を御覽遊ばしませ。何だか妙にお元氣がおありにならないで、お臥みになつてばかりいらつしやいますのは、物怪などが邪魔をしてゐるのでございませう」などと、氣が氣でないやうに云ふのである。

殿からは、あのおん文を返して上げてから後、御返事さへもおありにならないで日數が立つたが、右近が此の間恐ろしさうに話してゐた内舎人と云ふのが、或る日やつて來た。成る程、いかにも荒くれた無骨な様子をした老人で、皺唄れ聲の、さすがに何處か一癖ありげな男であるのが、「女房衆に申し上げたいことがござる」と云ひ入れたので、右近が居合せて應對をすると、「殿からお召しがござりましたので、今

朝京へ参つて、只今歸つたところでござるが、いろ／＼な御用を仰せ付けられたおついでに、かうして姫君が此方においてになる間、夜半よなの見廻りのことなどは、其方達かたたちがお付き申してゐることだからと思し召して、わざと京から宿直人とくちきんなどはお遣しにならなかつたのに、近頃聞し召すところでは、誰か分らない男が女房の許へ通ふと云ふやうな噂があるが、甚だ緩怠ゆるたではないか、夜番を勤める者共は事情を調べて知つてゐる筈だ、知らないでは済まされぬぞと、云ふお言葉でござる。しかし存せぬこととござるから、「某は體の工合がえらく悪うござりました、こゝ暫く宿直を勤めたことがござりませぬので、その邊あたのことも承知致しませぬ。尤も然るべき者共に云ひつけまして、油断なく見張りをさせてをります故、そのやうな非常な事がござりましたら、某の耳へ入らぬ筈はござりますまい」と申し上げたこととござつたが、

「よく氣を付けて警固申せ、不都合なことでもあつたら重い罰を申し付ける」と云ふ趣でござつたので、何でさう云ふ仰せ言があつたことやらと、恐れ入つてゐるのでござる」と云ふのに、鼻はなの啼なくの聞いたよりも物恐ろしく、答へもようせずにお奥へ這入つて、「さればこそ、お聞きなさいませ、私が申した通りのことになりました。やつぱり殿は事の様子をお感づきになつたらしうございます。あれからふつりおん文もおありにならないではございせんか」と歎くのであつたが、それをまた乳母が小耳に挟んで、「それはまあ、ようこそお叱言を仰つしやつて下さつた。此のあたりは盗人ぬすびとが多くて用心の悪い所なのに、宿直の人なども初めのやうに勤めてくれず、いつも代りの者だとか云つて、好い加減な下司げしの男ばかりを寄越すので、夜廻りよまさへもしないのだものを」と、喜んだりする。

イ、君に逢はんそ
の日はいつぞ松
の木の前で亂れ
て懸ぶる此のこ
ろ（新勳撰集）

ロ、昔津の國の娘
を菟原氏の男と
智努氏の男が同
じやうに熱心に
懸ひ慕うたの
で、娘の親が處
置に困つて、生
田川の水鳥を射
あてた方を彈に
しようと思ふ
と、一人は鳥の

首を射、一人は
尾を射た。娘は
思ひ詫びて、す
み詫びぬわが身
投げてんつ國
の生田の川は名
のみなりけり
と諒んで身を投
げたが、二人の
男もついでに身
を投げて、一人
は女の手をとら
へ、一人は足を
とらへて死んだ
と云ふ故事が大
和物語にあり、
尙それに似た話
が萬葉集十六卷
にもある

女君は、いよ／＼今が身の終りであると云ふやうな氣がなされるのに、
宮からは「いつになさるのですか」と「昔の亂るゝ」遣る瀬なさを訴
へてお寄越しになるので、どうしたらよいと云ふのであらうか、もう
かうなつては、どうせ執方か一方によくないことが起るのだから、我
が身一つを亡きものにしてしまふより外に、圓く收める方法はないか
も知れない、昔は二人の男から同じやうに懸想されて、執方にしてよ
いか分らなくなつたと云ふ、たゞそれだけのことにさへ思案に餘つて
身を投げた例もあるではないか、生きながらへてゐれば辛い目を見る
にきまつてゐる身を、捨てるのが何で惜しからう、母上もその當座こ
そお歎きになるであらうが、大勢の子達の世話に紛れ給うて、自然に
お忘れになるであらう、生きてゐたところで、身を持ち崩して人の笑
ひ物にされながらさ迷うてゐるのでは、死ぬにも優る御苦勞をかけな

ければならない、と、そんな風な考になられたのは、あどけなく、鷹
揚で、弱々しさうに見えてゐるけれども、上流の世の中と云ふものを
あまり覗いたことがなくて育つた人であるから、さう云ふ恐いやうな
ことを思ひつきもするのであらう。さて、後に遺しては悪い文殼など
を破るのにも、さう一遍に目につくやうには始末しないで、燈臺の火
で焼き、水に投げ入れなどして、少しづつ片をつけて行くのに、譯を
知らぬ女房達などは、京へお移りになることであるから、今日までつ
れづれの折柄などに何とはなしにいたづら書きをなすつた反古などを
處分していらつしやるのであらうと思ふのであつたが、たゞ侍従など
が見つけると、「どうしてそんなことを遊ばします。好いた同士のおん
間柄で、お心を籠めて書き交し給うたおん文などは、人にこそお見せ
になりませぬ迄も、篋の底に秘めてお置き遊ばして、とき／＼御覽に

なりませぬのが、誰にしましても、それ／＼身分相應に、哀れが深いものでございます。それに、そのやうな結構な御料紙をお使ひになつて勿體ないお言葉の數々をお盡しになつてあるものを、そんな工合にお破りになりますのは、情ないことではございませぬか」と云ふので、「何しに面倒なものを遺しておかう。どうせ長くはない體だから、此のやうなものが後で人手に渡ることがあつたら、宮も御迷惑をなさるであらう。殿がお聞き遊ばして、生意氣にこんなものを取つて置いたりしてなど、お思ひになるのも恥かしいから」など、仰せられる。が、さう云ふ風にいろ／＼心細いことを考へて行くと、矢張なか／＼決心がつきにくいものなので、親を見捨て、死ぬ人は非常に罪が深いものをなど、いつか誰かに聞いたことがあるのを、さすがに思ひ出したりにしてゐる。

そのうちに二十日過ぎにもなつた。かの家主人は廿八日に任國へ下ると云ふので、宮からは、「その日の夜には必ず迎へに行きますから、下人などに氣取られないやうに、よく氣を付けて下さいよ。私の方は決して人に知れるやうなことはありませぬ。疑つてはなりませぬよ」など、仰つしやつてお寄越しになるのであつたが、それにしても、折角お姿をお窺しなされて忍んでおいで遊ばすのに、今一度お目にかゝつてお話し申し上げることも出来ず、心にかゝりながらお歸し申してしまふ口惜しさ、さうかと云つて、こんなに見張りが厳しくなつては、何としてちよつとの間でも此の家の内にお請じ申すことが出来ようぞ、結局いらしつた甲斐もなく、お恨みになりながらお歸りになる御様子などを思ふと、又してもおん面影が浮んで来て、泳へやうもなく悲しくなるので、おん文を顔に押し當てつゝ、暫くは慎んでゐなければ

も、溜らなくなつて、激しく泣き出しておしまひになる。すると右近が、「まあ、お姫様、それでは今にみんなが気が付くでございませう。だん／＼訝しう思ふ者もゐるらしうございます。さういつ迄も御思案ばかりなすつていらつしやらないで、何とでもお宜しいやうに御返事をお上げなされませ。右近が附いてをりますからには、どんな思ひ切つた謀でも運らしますから、此のやうなお小さいお體の一つぐらゐ、空を飛んでゞも宮がお連れ出しになりますでせう」と云つたりするの、暫く涙を押へながら、「そんな風にはかり云はれるのが、いつそ私は辛いのです。それを正しいことのやうに思つてゞもゐるならですが、道に外れてゐると云ふことは、ちやんと私には分つてゐるのに、かう云ふ風に、まるで此方からお籠り申してゞもゐるやうに無闇に仰せられるので、どんなことをなさるおつもりかと思ふにつけても、此の身

が淺ましうなつて來るのです」と仰せになつて、おん返りごとも聞え上げないでしまはれる。

宮は女君がそんな工合に、矢張なか／＼聴き入れさうなけはひもなく、返りごとをさへめつたに寄越さないやうになつたのは、大方大將が然るべく説きつけたからで、幾らかでも安心な方へ靡くことに極めたのであらう、それも道理であるとお思ひになりはするものゝ、ひどく残念にも妬ましうもお感じなされて、さうは云つてもあれほど自分を戀ひ慕うてゐたものを、逢はずにゐる間に周りの者がいろ／＼なことを吹き込むものだから、その方へ引き寄せられたのであらうなど、深くお考へ込みになるにつれて、「行くかた知らず空しいそらに満ちる」やうな心地が遊ばすので、例の一途に思ひ立ち給うてお渡りになつたが、先づ時方があの葦垣のあたりへ行くと、いつになく見張りの者共

い、わが戀は空し
きそらに満ちぬ
らし思ひやれど
も行くかたもな
し〔古今集〕

がすばやく眼を覺まして、「あれは誰だ」と口々に云ふので、引き返して来て、いつも使に寄越す様子を知つた男を遣すと、それをさへ押し止めて問ひ質すのである。使の男は、今迄とは勝手が違つてゐるのを厄介なことに思ひながら、一京から急なおん文を持つて参りました」と云つて、右近の従者の名を呼んで、それと會ふには會つたけれども、右近もひどく迷惑がつて、「今宵はとても駄目でございます、えらいお氣の毒に存じ上げますが」と挨拶をさせる。宮は、何でかう急にそのけなくするのであらうとお思ひになると、溜らなくおなりなされて、「兎に角其方が先に行つて、侍従に會うて、何とか巧く拵へるやうに」と仰せになつて、時方をお遣しになるのであつたが、氣轉の利いた人であるから、どうにか口實を作り出して、やう／＼侍従に會つてみると、「どう云ふ譯か、殿のお云ひつけがあつたとか申しまして、宿直を

してゐる者共が近頃俄に出しやばるやうになりましたので、えらく難儀なのでございます。姫君がひどく物案じをなすつていらつしやいますのも、かう云ふことになりましたのを勿體なく思し召されて、途方にくれておいでになるのだと、お可哀さうに存じ上げてゐるのでございますが、でも、今宵は何と致しましても、人のけはひがしますのをあの者共が見付けましたら、却つて後のためにたいそう不都合でございませう。いづれお迎へをお寄越しになつて下さいます當夜は、私の方でもそうつと用意を調へまして、お知らせ申すことに致します」と云つて、乳母が眼敏いことなども語るのであつた。時方は、「此處までおいでになる道中も竝大抵ではないのですし、ひたむきに焦れていらつしやいますのに、そんな張合のないことを私の口から聞え上げるのは、何か怠慢のやうにもなります。ではあなたもい

らしつて、御一緒に委しう申し上げて下さい」と誘ふのであるが、「それは困ります」などと云つて争つてゐるうちに、夜もたいそう更けて行く。宮はお馬にお召しなされて、少し遠く離れた所にお立ちになつていらつしやつたが、田舎犬が何匹も出て来て吠えるのも氣味が悪く、僅かなお供をしかお連れにならない、いかにも胡散らしう見えるお忍び歩きのことであるから、不心得な者などが現はれたらどうしようかと、侍ふ限りの人々が氣を揉んでゐると、「まあ、さう仰つしやらないで、早う〜」と急き立てながら、とう〜侍従を引つ張つて來た。垂れた髪の毛を、脇の下から前へ出して手で抱へてゐる。たいそう姿の美しい人なのであるが、馬に乗せようとしてもいつかな聽かないので、時方が衣の裾を持ちながら附き添うて、自分の沓を侍従に穿かせて、自分は従者の粗末な沓を穿いてゐる。お前へやつて來て、斯

イ、草又は毛皮で作つた馬具の一種。馬の腹の兩側を覆うて泥がかゝらないやうにするもの

様斯様と聞え上げるのに、道の端では相談さへもお出來にならないので、山樵の垣根の中の、棘や葎の生えてゐる蔭に障泥と云ふものを敷いて、そこへお下し申し上げると、おん自らもお心のうちに、此の爲體は何としたことか、結局自分がかう云ふことに身を過つて、つまらなく終つてしまふのであらうと思ひつゞけ給うて、際限もなくお泣き遊ばされるのに、氣の弱い侍従は、まして云ひやうもなく悲しう存じ上げる。ほんに、深い怨みのある人間を鬼に作つたとしても、此のおん有様を見たら、心を動かさずにはゐられないやうな光景なのであるが、暫くためらひ給うてから、「たゞの一言も話すことは出來ないのであらうか。どうして今更こんなことになつたのか。やつぱり端がいろいゝるなことを云つたのであらう」と仰せられるのに、事情を委しく申し上げて、「京へお迎へになります日をおきめ遊ばして、前から然るべ

きやうに手だてをお考へなさいませ。こんな勿體ないところをお拜み申しましたからには、身を捨てましても御意に叶ふやうに取り計らふでございませう」と聞え上げるので、おん自らも人目を憚り給ふことであるから、一途にお怨じになる譯にも行かない。さう云ふうちにも夜がだん／＼更けて行つて、さつきの犬どもが絶え間なく吠えつゞけるのを、お供の人々が追ひ散らしなどしてゐると、弓弦を鳴らす怪しい男どもの聲がして、「火の用心」など云つてゐるので、なほさら慌しうおなりなされて、お歸り遊ばされるお心持は申す迄もないのであるが、

「いづくにか身をば捨てんとしら雲の

かゝらぬ山もなく／＼ぞ行く

では早う」と仰せになつて、侍徒をお歸しになるのが、おんけはひも

イ、弦打のこと。
夕顔四三頁頭註
参照

なまめかしう、おん哀れに、夜半の露に濕つてゐるお召物の香の匂なども、たとへやうもおありにならないのに、泣く／＼お暇を申し上げる。

女君は、右近がさつき時方の従者に斷りを云つた話をするのを聞きながら、ひとしほさま／＼に思ひ亂れてお横になつていらつしやると、そこへ侍従が這入つて来て、今のいきさつを語るのに返事もせずにあつたが、枕がだん／＼浮き上るやうになつて来るのを、此の人たちがどのやうに眺めるであらうかと恥かしう、明くる日の朝も、眼が泣き脹れてゐることを思ふと、いつかな起き上る氣にもなれないが、やう／＼のことで、假初に帯を引つかけなどして經を讀みながら、親に先立つ罪をお赦し下さるやうにとばかり思ふ。いつぞやの繪を取り出して見ると、それをお畫きになつた時のおん手つき、お顔の匂な

どが、さながら今も向ひ合つてゐるやうに浮んで来るので、ゆうべ一言も交さずにお歸し申してしまつたことが、今になつてから一倍悲しう感ぜられて来る。さうかと思ふと、あの、此方へ引き取つて上げてからゆつくりお逢ひしませうと、末永く變らぬことを云ひ暮していらしつたお人の方も、どんなにお歎きになるであらうとおいとほしう、死んだ後でよくないことを人に云はれたりするのが、考へてもきまりが悪うけれども、生きてゐて、心の浅い怪しからぬ女のやうに云はれて、物笑ひの種にされるのをお目に懸けるよりはなどゝも思ひつゞけられる。

歎きわび身をば捨つともなきかけに

うき名ながさんことをこそおもへ

母上もひどく戀しいし、いつもは思ひ出したこともない姉妹たちの、

醜い顔だちをしたのも戀しい。宮のおん方のことをお偲び申し上げるにつけても、今一度會つておきたい懐しい人が大勢ゐる。女房たちはめい／＼物を染めたりして、京へ行く支度を急ぎながら、何や彼やとしやべつてゐるけれども、そんなことは耳にも入らない。夜になれば、誰にも見つけられないやうに脱け出す道を考へたりして、寝られないまゝに気分もすぐれないので、すつかり病人のやうになつてしまつた。そして夜が明けると、川の方を眺めやりながら、屠所の羊よりも一層死期が迫つてゐるやうに感じるのである。

宮は切ないお胸の中を仰つしやつてお寄越しになるのであつたが、今更誰方にお逢ひしようと思ふ氣もないので、そのおん返りごとをさへ思ふやうにもしたゝめないで、

からをだに浮世の中にとゞめずば

いづこを墓と君もうらみん

とばかり書いて上げる。殿にも今生の御挨拶を申し上げたいところだけれども、彼方にも此方にも書き送つたら、お睦じいおん間柄のことであるから、お互に語り合はれて、結局兩方へ來たと云ふことが知れたりしては、面白くあるまい、矢張どうなつてしまつたとも、誰にもはつきり分らないやうにして死なうなど、思ひ直す。と、京から母北の方のおん文を持つて來た。「昨夜あなたがた々ならぬ御様子で夢にお見えになりましたので、方々の寺々で誦經などをさせてゐますが、その夢のあとで寝られなかつたせゐか、只今睡たくなりまして晝寢をしましたら、世間の人が不吉だと云ふ事がお身の上に起つた夢を見ましたので、驚いて此の文を上げるのです。よく／＼お慎みになつて下さいましよ、人里を離れたお住居のことですし、をり／＼そちらへお通

イ、驚をさす
ロ、蕪の北の方
女二宮をさす

ハ、少將の北の方
になつた常陸守
の姫をさす

ひになるお人の、由縁のおん方のお怨みなどもたいそう恐ろしう存じます。御氣分がお悪いと云ふ時に斯様な夢を見たのですから、ほんに何かと心配になります。お伺ひしたいのですけれど、少將の方が、お産の後がまだどうもはつきりしませんで、物怪が憑いたらしう惱んでゐるものですから、ちよつとでも側を離れてはならぬと、守にやかましく云はれるのです。どうかそちらの御近所の寺でも、誦經をおさせになつて下さい」と云つて、そのお經の布施の品物に、僧へ遣す文なども添へてある。もう今日限りの命と覺悟してゐることも御存知がなく、そんなにいろ／＼と仰つしやつて下さるのをひどく悲しう思ひながら、寺へ使を遣つてゐる間に返事をした、めるのであつたが、云ひたいことはいくらでもあるのに、云へなくなつてしまつて、たゞ、後にまた相見んことを思はなん

この世の夢にこゝろまどはで

誦經の鐘が風に傳つて聞えて來るのに、つく／＼と耳を傾けながら臥し給うて、

鐘のおとの絶ゆる響に音をそへて

わが世つきぬと君に傳へよ

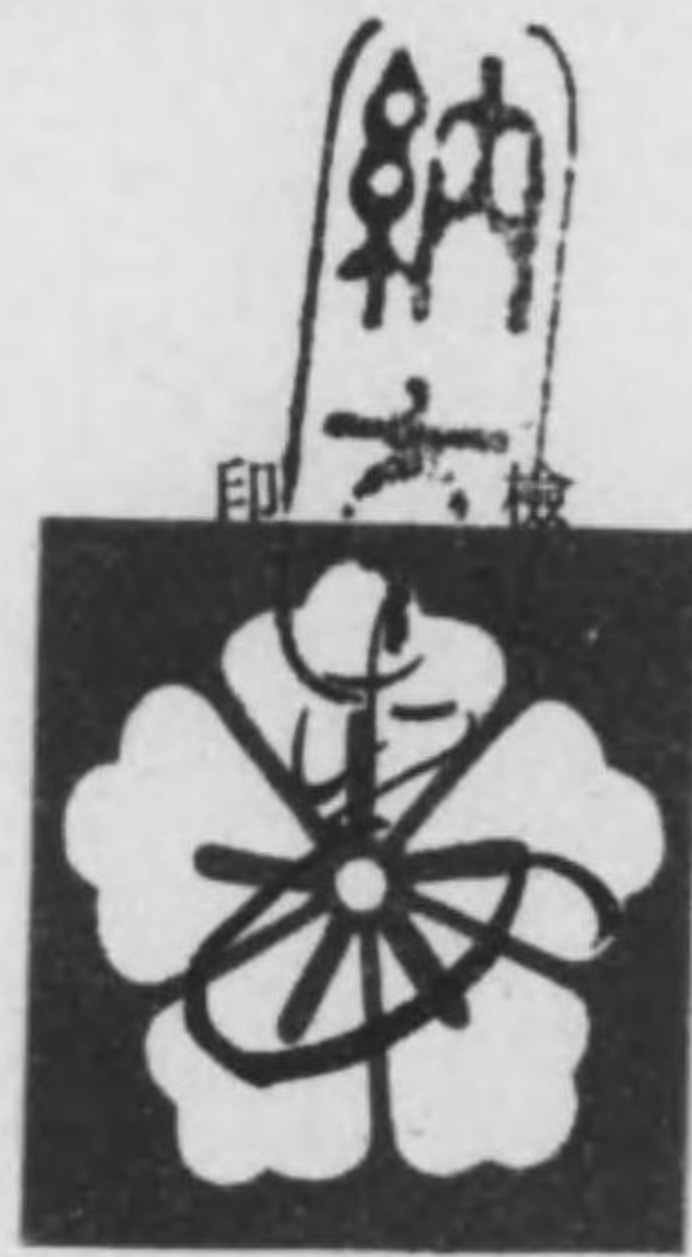
寺から持つて來た卷數くわんじゆに書きつけて、使の者が「今宵はよう歸りませぬ」と云ふので、その木の枝えだに結びつけて置くと、乳母が、「變に胸騒ぎがすること、夢見もお悪かつたとやら仰つしやつてお寄越しになつたのだから、番人達によく氣を付けるやうに申し付けて下さいよ」など云つてゐる。それを心苦しう聞きながらお横になつていらつしやると、「どうして物を召し上らないのでございませう、お湯漬なりとも」など云つて、いろ／＼心配してくれるのであるが、利根りねがつても、

イ、誦誦した經文の名や卷數などを記して、寺から願主へ届ける書付
ロ、卷數は木の枝に結びつけてあるので、それへその歌をも着けるのである

ひどく皺だらけな年寄になつてゐるのだから、私が死んだらどうなるであらうと思ひやり給ふのも哀れである。せめて、もう世の中にゐられないやうになつた仔細を、よそながらでも知らしておやりになりたいのだけれども、さうお思ひになる途端に、言葉より先にどつと溢れて來さうな涙を、袂へようとなさるところから、物を云ふこともお出來にならない。右近がお側近う寝かして戴くと云つて、「そんな風に考へごとばかりなすつていらつしやいますと、物思ふ人の魂は體の外に憧れ出るものでございませう、いかさま母君も不吉な夢を御覽になるのでございませう。何として、執方とちかたになりと御料簡をきめておいで遊ばしませ」と打ち歎くのに、おんおん自らは萎なえた衣きぬを顔に押しあて、打ち臥しておいでになつたとやら。



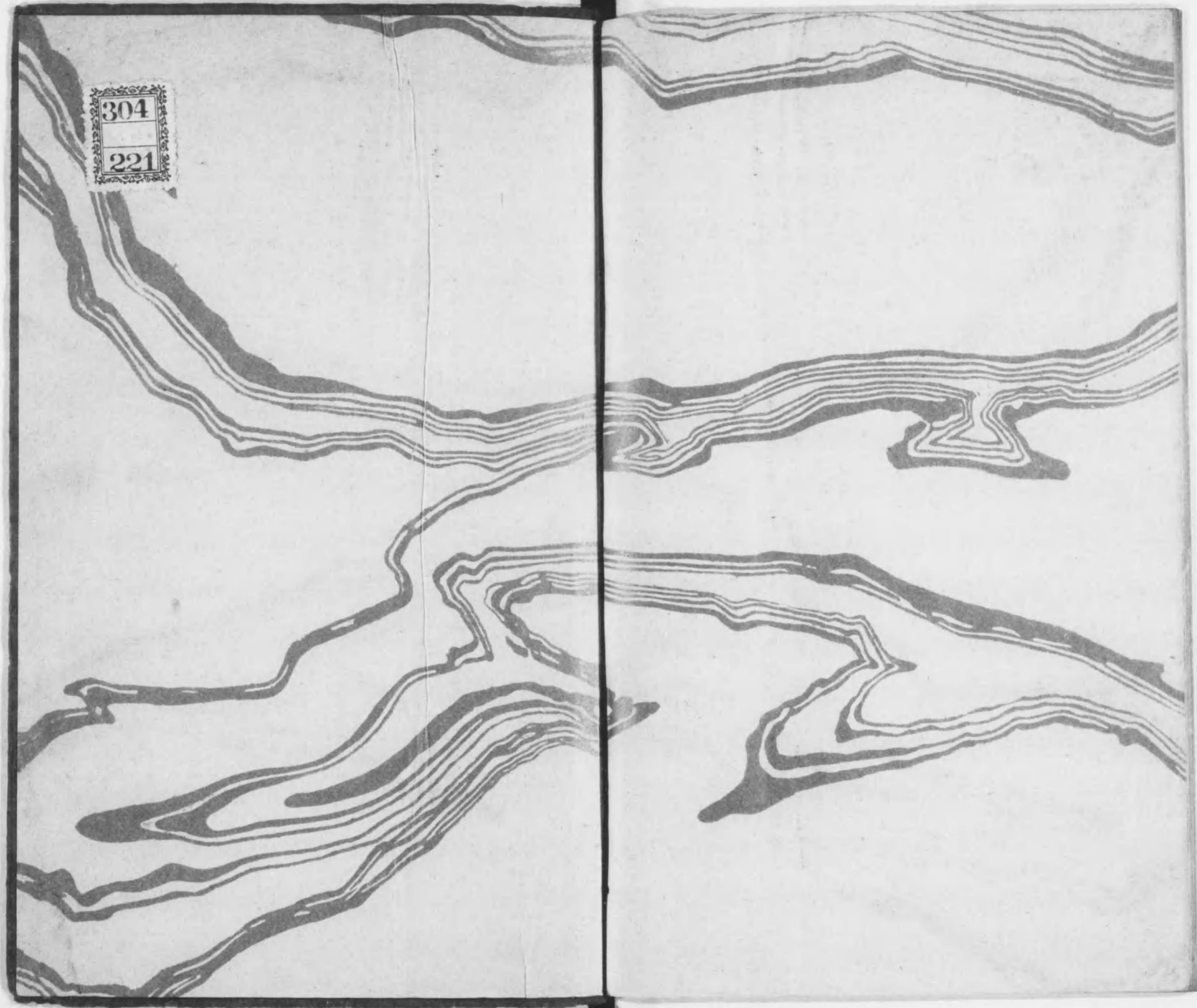
昭和十五年十二月五日印刷
昭和十五年十二月十五日發行



源氏物語卷二十一
豫約會費金一圓

譯者	谷崎潤一郎
校閱者	山田孝雄
發行者	木田開 東京市麴町區丸の内二丁目二番地の一
印刷者	堀修造 東京市牛込區榎町七番地
印刷所	大日本印刷株式會社榎町工場 東京市牛込區榎町七番地
發行所	中央公論社 東京市麴町區丸の内二丁目丸の内ビルディング五八八區 振替 東京三三四番 電話丸の内五三五番 五三六番 五三七番 五三八番

304
221



終

